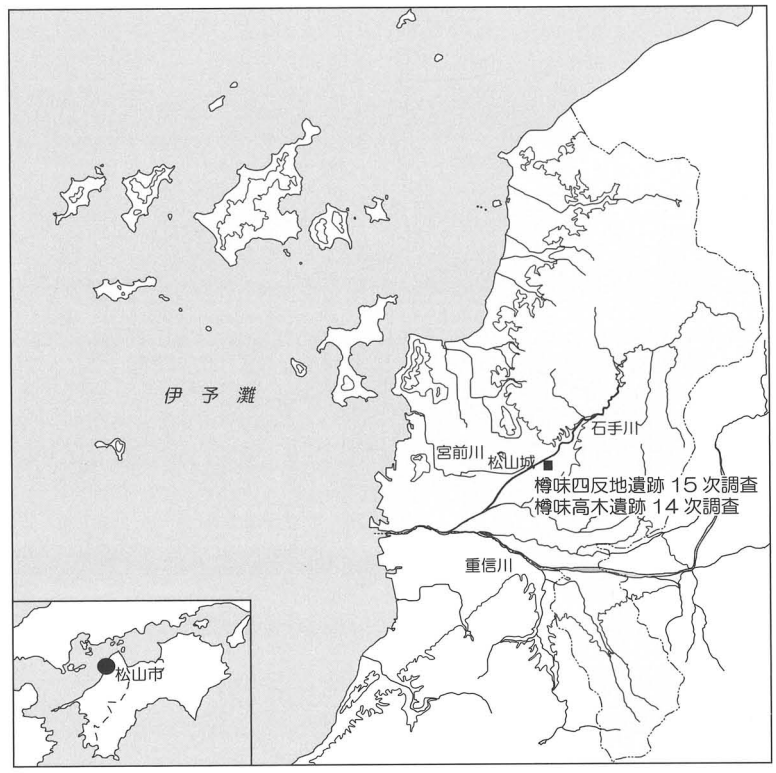
松山市文化財調査報告書144

樽味四反地遺跡15次調査
樽味高木遺跡14次調査

2010

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

樽味四反地遺跡15次調査
樽味高木遺跡14次調査



2010

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

序

松山市樽味・桑原地区は、松山平野の中央部を南西に流れる石手川の中流域左岸に位置しています。近年、宅地開発や市道樽味溝辺線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査によって縄文時代から中世にかけての集落の様相が明らかになってきました。そのなかでも、樽味四反地遺跡では西日本有数の規模を誇る弥生時代後期末から古墳時代初頭の大型建物址３棟が発見されたほか、周辺の遺跡でも関連する集落遺構や遺物が数多く確認されています。

本書で報告します樽味四反地遺跡15次調査と樽味高木遺跡14次調査は、宅地開発に伴って平成18・19年度に実施した発掘調査で、大型建物址とその前後の時期における集落の分布状況の確認をめざして実施しました。発掘調査の結果、主に弥生時代から中世にかけての集落関連遺構や遺物を確認することができました。これらは当時の集落の構造や変遷を考える上で重要な手がかりとなるものです。

本書が、埋蔵文化財の調査研究の一助となり、さらには文化財保護と生涯学習の向上に寄与できることを願っております。

最後に、発掘調査及び報告書刊行にご協力いただきました地権者ならびに周辺の住民の方々、関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成22年３月31日

財団法人松山市生涯学習振興財団
理事長　　中　村　時　広

例　　言

1．本書は、松山市樽味四丁目において松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが2006（平成18）年７月10日から８月９日までの間に実施した樽味四反地遺跡15次調査、及び2007（平成19）年７月23日から８月３日までの間に実施した樽味高木遺跡14次調査の発掘調査報告書である。

2．遺構は呼称を略号で記述した。溝：ＳＤ、土坑：ＳＫ、柱穴：ＳＰ、性格不明遺構：ＳＸである。

3．本書に表示した標高数値は海抜標高を示し、方位はすべて国土座標を基準とした真北である。

4．遺構の撮影は、大西朋子と山之内志郎が行い、遺物の撮影・写真図版の作成は大西が行った。

5．遺物の実測及びデジタル製図、遺構図のデジタル製図は、木下奈緒美、田﨑真理、多知川富美子が行った。

6．縮尺は弥生土器が1/4、土師器・須恵器・陶磁器等が1/3、石製品が1/3・1/4、鉄製品が1/2、青銅製品が1/1を基本とし、縮分値をスケール下に記した。

7．本書に関わる出土遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

8．本書の執筆及び編集は山之内が行い、木下、多知川、髙尾久子の協力を得た。

製版　写真図版－175線
印刷　オフセット印刷
用紙　本　　文－マットコート62.5kg
　　巻末図版－マットコート76.5kg
製本　アジロ綴じ

本 文 目 次

第１章　はじめに
1. 調査に至る経緯 …… 1
2. 刊行組織
3. 立地と環境

第２章　樽味四反地遺跡15次調査
1. 調査の経過 …… 9
(1) 調査に至る経緯　(2) 調査の経緯　(3) 調査組織
2. 層　位 …… 10
(1) 基本層位　(2) 検出遺構・遺物
3. 遺構と遺物 …… 13
(1) 古代の遺構と遺物
(2) 古墳時代以前の遺構と遺物
(3) 古墳時代の遺構と遺物
(4) 中世の遺構と遺物
(5) その他の遺構と遺物
4. 小　結 …… 27

第３章　樽味高木遺跡14次調査
1. 調査の経過 …… 35
(1) 調査に至る経緯　(2) 調査の経緯　(3) 調査組織
2. 層　位 …… 36
(1) 基本層位　(2) 検出遺構・遺物
3. 遺構と遺物 …… 38
(1) 弥生時代中期以前の遺構
(2) 古墳時代以前の遺構
(3) その他の遺構と遺物
4. 小　結 …… 41

第４章　調査の成果と課題 …… 48

挿　図　目　次

第１図　調査地と周辺の主要遺跡分布図（1）（縮尺1/25,000）…… 4
第２図　調査地と周辺の主要遺跡分布図（2）（縮尺1/2,000）…… 5
第３図　調査地位置図（縮尺1/1,000）…… 10
第４図　南壁土層図（1）（縮尺1/40）…… 11
第５図　南壁土層図（2）、西壁土層図、東壁土層図（縮尺1/40）…… 12
第６図　遺構配置図（縮尺1/200）…… 14
第７図　ＳＤ１測量図（縮尺1/150）…… 15
第８図　ＳＤ１出土遺物実測図（1）（縮尺1/3）…… 17
第９図　ＳＤ１出土遺物実測図（2）（縮尺1/3）…… 18
第10図　ＳＤ１出土遺物実測図（3）（縮尺1/4・1/2）…… 19
第11図　ＳＤ２出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 19
第12図　ＳＤ３・ＳＤ４測量図、ＳＤ３出土遺物実測図（縮尺1/100・1/3）…… 20
第13図　ＳＫ１測量図（縮尺1/20）…… 21
第14図　ＳＫ２測量図、出土遺物実測図（縮尺1/20・1/3）…… 22
第15図　ＳＫ３測量図（縮尺1/20）…… 23
第16図　ＳＫ３出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 24
第17図　ＳＫ４測量図（縮尺1/20）…… 25
第18図　ＳＫ４出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 25
第19図　ＳＫ５測量図（縮尺1/20）…… 25
第20図　ＳＰ21測量図（縮尺1/20）…… 26
第21図　ＳＰ出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 27
第22図　層位不明遺物実測図（縮尺1/3）…… 28
第23図　調査地位置図（縮尺1/1,000）…… 36
第24図　１区北壁土層図、２区南壁土層図（縮尺1/40）…… 37
第25図　遺構配置図（縮尺1/100）…… 39
第26図　ＳＤ１測量図（縮尺1/20）…… 40
第27図　ＳＫ１測量図（縮尺1/20）…… 40
第28図　ＳＸ１測量図（縮尺1/20）…… 40
第29図　１区第Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3・1/1）…… 42
第30図　１区第Ⅳ層出土遺物実測図（1）（縮尺1/3）…… 42
第31図　１区第Ⅳ層出土遺物実測図（2）（縮尺1/4・1/3）…… 43
第32図　２区第Ⅳ層出土遺物実測図（縮尺1/4・1/3）…… 44
第33図　１区層位不明遺物実測図（縮尺1/3）…… 45

表　目　次

表 1　調査地一覧 …… 1
表 2　溝一覧 …… 29
表 3　土坑一覧 …… 29
表 4　ＳＤ１出土遺物観察表　土製品 …… 29
表 5　ＳＤ１出土遺物観察表　石製品 …… 31
表 6　ＳＤ１出土遺物観察表　鉄製品 …… 31
表 7　ＳＤ２出土遺物観察表　土製品 …… 31
表 8　ＳＤ３出土遺物観察表　土製品 …… 31
表 9　ＳＫ２出土遺物観察表　土製品 …… 31
表10　ＳＫ３出土遺物観察表　土製品 …… 31
表11　ＳＫ４出土遺物観察表　土製品 …… 31
表12　柱穴出土遺物観察表　土製品 …… 32
表13　層位不明遺物観察表　土製品 …… 32
表14　層位不明遺物観察表　石製品 …… 32
表15　溝一覧 …… 45
表16　土坑一覧 …… 45
表17　性格不明遺構一覧 …… 46
表18　１区第Ⅲ層出土遺物観察表　土製品 …… 46
表19　１区第Ⅲ層出土遺物観察表　青銅製品 …… 46
表20　１区第Ⅳ層出土遺物観察表　土製品 …… 46
表21　２区第Ⅳ層出土遺物観察表　土製品 …… 47
表22　１区層位不明遺物観察表　土製品 …… 47

写真図版目次

図版１　1. 調査前風景（北西より）
2. 掘削状況（北西より）
3. 南壁土層（北より）
図版２　1. 遺構検出状況（西より）
2. ＳＤ１検出状況（北東より）
3. ＳＫ１・ＳＰ11検出状況（南より）
図版３　1. ＳＫ３土層（北西より）
2. ＳＰ21遺物出土状況（南より）
3. 完掘状況（西より）
図版４　1. ＳＤ１出土遺物、ＳＫ３出土遺物、ＳＫ４出土遺物、ＳＰ21出土遺物、層位不明遺物
図版５　1. 調査前風景（北東より）
2. １区Ａ完掘状況（東より）
3. １区Ｂ第Ⅲ層検出状況（東より）
図版６　1. ＳＫ１完掘状況（南より）
2. １区Ｂ遺物出土状況①（東より）
3. １区Ｂ遺物出土状況②（東より）
図版７　1. １区Ｂ完掘状況（西より）
2. ２区完掘状況（東より）
3. 作業風景（西より）
図版８　1. １区第Ⅲ層出土遺物、１区第Ⅳ層出土遺物、２区第Ⅳ層出土遺物

第1章　はじめに

1．調査に至る経緯

2006（平成18）年６月、松山市樽味四丁目196番の一部、205番（以下、申請地①）における分譲住宅建設工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが地権者より松山市教育委員会文化財課(以下、文化財課)に提出された。この申請地①は同年２月に別の申請者によって既に申請書が提出され、５月26日(金)に埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）によって行われた。試掘調査の結果を受け、申請者と文化財課・埋文センターは、遺跡の取り扱いについて協議を重ね、工事に伴って消失する遺跡に対し記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、弥生時代から中世における集落構造の解明及び範囲確認を主目的とし、文化財課の指導のもと埋文センターが主体となり同年７月10日より本格調査を開始した。

一方、翌2007（平成19）年６月、松山市樽味四丁目256番１（以下、申請地②）における共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが地権者より文化財課に提出された。申請地②は、申請地①と同様、埋蔵文化財包蔵地「No.81　樽味遺物包含地」内にあり、埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査が埋文センターによって６月14日に行われた。試掘調査の結果を受け、申請者及び関係者と文化財課・埋文センターは、遺跡の取り扱いについて協議を重ね、工事に伴って消失する遺跡に対し記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、弥生時代から中世における集落構造の解明及び範囲確認を主目的とし、文化財課の指導のもと埋文センターが主体となり同年７月23日より本格調査を開始した。

なお、両遺跡とも屋外調査終了後は埋文センターが主体となり屋内調査及び報告書作成作業を実施した。

表１　調査地一覧

遺　跡　名	所　在　地	面積(㎡)	調査期間
樽味四反地遺跡15次調査	松山市樽味四丁目196番の一部、205番	220	平成18年7月10日～8月9日
樽味高木遺跡14次調査	松山市樽味四丁目256番1の一部	25.4	平成19年7月23日～8月3日

2．刊行組織（平成21年４月１日現在）

松山市教育委員会	教育長	山内　泰
事務局	局長	藤田　仁
	企画官	古鎌　靖
	企画官	青木　茂
	企画官	佐々木乾二
文化財課	課長	家久　則雄
	主幹	森　正経
	副主幹	三好　博文

財団法人松山市生涯学習振興財団	理　事　長	中村　時広
	事務局長兼松山市考古館館長	松澤　史夫
埋蔵文化財センター	所長兼総務課長	白石　修一
	次　　長	折手　　均
	次　　長	重松　佳久
	調査担当リーダー	栗田　茂敏
	教育普及担当リーダー	梅木　謙一
	調　査　担　当	山之内志郎
		大西　朋子（写真担当）

3．立地と環境

（1）地理的環境

松山平野は、瀬戸内海に突出する高縄半島の西縁部に位置し、北東部は高縄山、南東部は四国山地に囲まれている。この平野は、石手川のほか重信川・小野川などで形成された複合扇状地堆積物と沖積低地と浜堤などで形成されている。このうち石手川は高縄山地に水源を発し、平野北東部を西流しながら半径約４kmの扇状地を形成している。

本遺跡が所在する樽味・桑原地区は、この新期扇状地面の扇央、標高39～40mの石手川南岸に立地しており、弥生時代から中世にかけての遺跡が数多く立地している。

（2）歴史的環境

ここでは、当該地区における旧石器時代から中世にかけての遺構や遺物について概観する。

旧石器時代

当該期の遺構は現在のところ確認されていないが、樽味四反地遺跡6次調査や東本遺跡4次調査でナイフ形石器が出土している。また近年の発掘調査では、AT火山灰の堆積が各地で確認されている。東本遺跡4次調査では１次堆積、樽味遺跡１次調査や樽味四反地遺跡１次調査では２次的な堆積状況が確認されている。

縄文時代

当該期の遺構としては、晩期の貯蔵穴数基が確認されている。これは樽味立添遺跡３次調査、東野森ノ木遺跡２・４次調査で検出しているもので、長さ１～1.5m、幅0.5～１mを測る隅丸長方形を呈している。また、東本遺跡４次調査ではアカホヤ火山灰の堆積が確認され、その下位において槍先形石器やスクレイパーなどの石器類が出土しているほか、これらに近接して焼土塊や焼土面も検出している。

弥生時代

前期前半は樽味遺跡５次調査において竪穴住居が検出されている。前期後半では樽味四反地遺跡７次調査において南北方向の溝が検出されているほか、前期末～中期初頭では樽味立添遺跡３次調査において大溝が検出されており、区画溝の可能性が指摘されている。中期後半～後期初頭では、樽味高木遺跡２次調査や樽味四反地遺跡５次調査では、方形の小型竪穴住居が検出されているほか、直径９m以上を測る大型の円形竪穴住居も樽味四反地遺跡５次調査で確認されている。それより以

前の中期前半においては、東野森ノ木遺跡４次調査において大型壺を使用した土器棺墓を検出している。後期後葉から終末期にかけては樽味立添遺跡、樽味四反地遺跡、樽味高木遺跡、束本遺跡などで円形や方形竪穴住居が数多く検出されている。

古墳時代

弥生時代後期末から古墳時代初頭には、総柱構造をもつ大型建物址３棟が樽味四反地遺跡６・８・13次調査でそれぞれ検出されている。このような首長階層の建物群は周辺の一般集落とは隔絶して存在している。中期以降は竪穴住居の検出例が増加し、樽味高木遺跡７～９・11・12次調査、樽味四反地遺跡７～９・16次調査などで方形または長方形の住居が検出されている。特に樽味四反地遺跡７次調査のＳＢ304は隅丸長方形の竪穴住居であり、内部より朝鮮系軟質土器や算盤玉形紡錘車が出土しており、渡来人との関わりを示す住居として注目される。後期においても樽味高木遺跡、樽味四反地遺跡、樽味立添遺跡などで多くの竪穴住居や掘立柱建物が検出されている。

古代

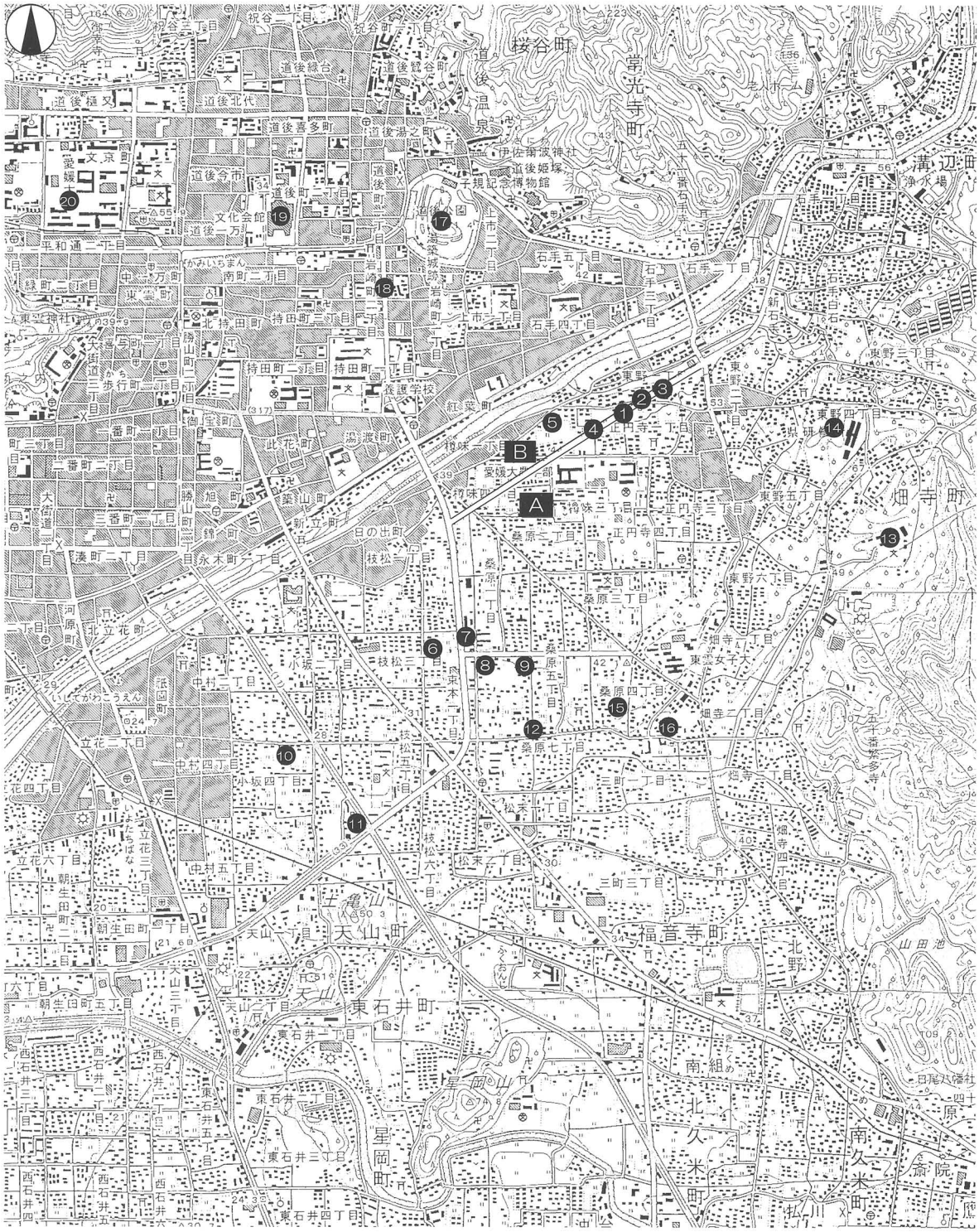
当該時期の遺跡はあまり検出されていない。樽味四反地遺跡１・５次調査では自然流路が検出されているほか、樽味四反地遺跡14次調査では古墳時代から古代の溝が検出され、集落を区画するための溝の可能性が指摘されている。遺物では、樽味四反地遺跡５次調査で円面硯が複数点出土しており、寺院や役所などの識字層の存在が考えられる。樽味四反地遺跡12次調査では包含層中より平安時代後期の土師器が出土している。

中世

中世以降の遺構についてもあまり検出されていない。東野森ノ木遺跡１次調査では、掘立柱建物や溝を検出したほか、土坑内から白磁四耳壺が埋納状態で検出されている。

〔参考文献〕

宮本　一夫「樽味遺跡」『鷹子・樽味遺跡』1989愛媛大学埋蔵文化財調査室
梅木　謙一ほか「樽味四反地遺跡」「樽味立添遺跡」「樽味高木遺跡」『桑原地区の遺跡』1992　㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
田崎　博之「樽味遺跡２次調査」『樽味遺跡Ⅱ』1993愛媛大学埋蔵文化財調査室
梅木　謙一ほか「樽味四反地遺跡２・３・４次調査」「樽味高木遺跡２次調査」「樽味高木遺跡３次調査」『桑原地区の遺跡Ⅱ』1994　㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
高尾　和長『樽味四反地遺跡５次調査』2002　㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
小玉亜紀子『樽味四反地遺跡－６次調査－　弥生時代～古墳時代初頭編』2003　㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
高尾　和長ほか『東野森ノ木遺跡１・２・３・４次調査　樽味立添遺跡３次調査　樽味高木遺跡７・８・９・11次調査　樽味四反地遺跡７・８・９・11次調査　枝松遺跡６次調査』2007　㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
相原　秀仁ほか『樽味四反地遺跡－12・13次調査－』2009　㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
宮内　慎一ほか『樽味四反地遺跡－14・16次調査－』2009　㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
宮内　慎一ほか『樽味高木遺跡－12・13次調査－』2009　㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター



(S=1：25,000)

A 樽味四反地遺跡15次　B 樽味高木遺跡14次

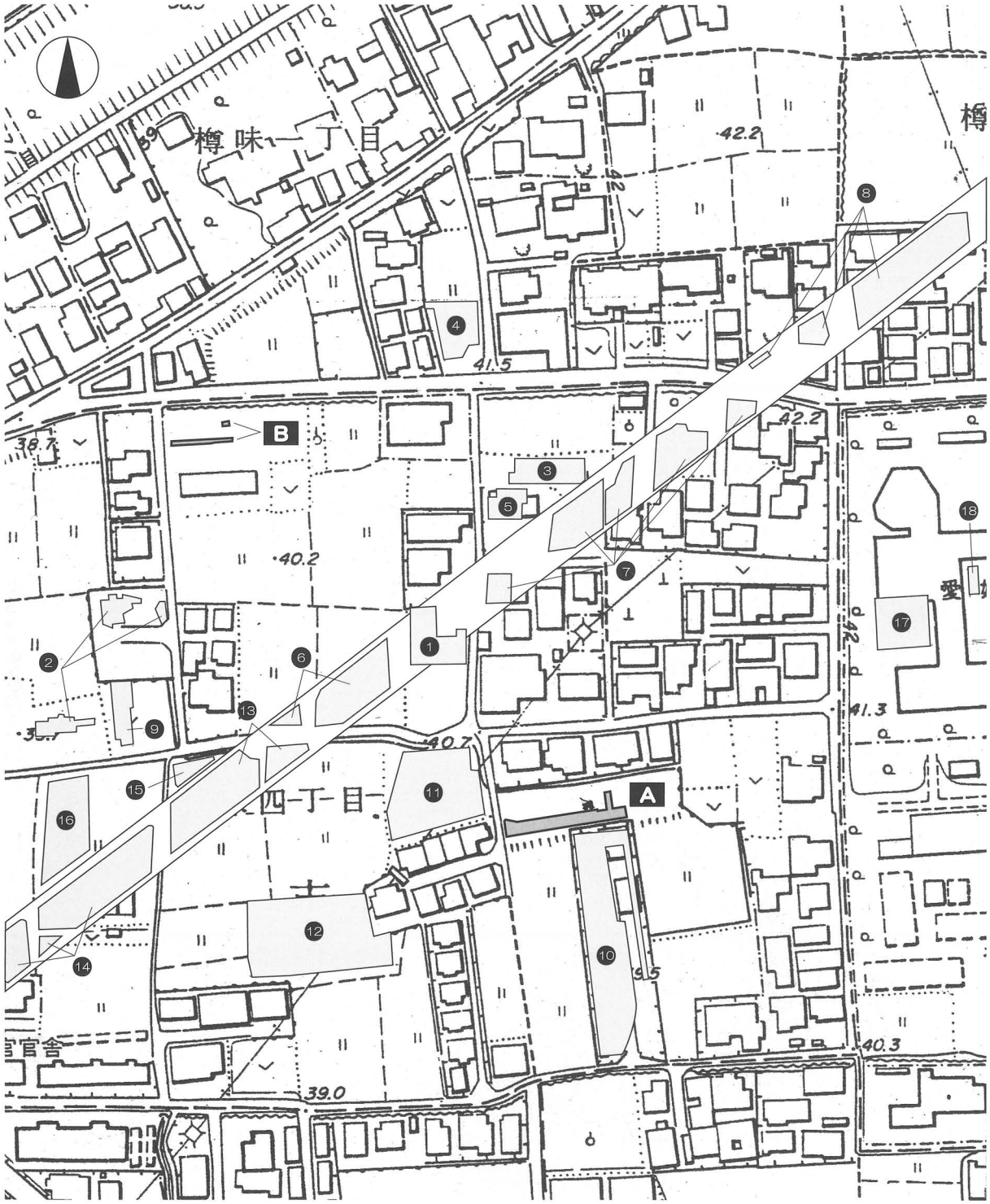
1 東野森ノ木遺跡1次　2 東野森ノ木遺跡2次　3 東野森ノ木遺跡4次　4 樽味立添遺跡3次　5 樽味立添遺跡1次

6 枝松遺跡3次　7 東本遺跡4次　8 東本遺跡6次　9 桑原遺跡4次　10 釜ノ口遺跡7次

11 釜ノ口遺跡8次　12 桑原田中遺跡1次　13 畑寺竹ケ谷古墳群　14 東野お茶屋台古墳群　15 経石山古墳

16 三島神社古墳　17 湯築城址　18 岩崎遺跡　19 道後今市遺跡　20 文京遺跡

第1図　調査地と周辺の主要遺跡分布図（1）



A 樽味四反地遺跡15次　**B** 樽味高木遺跡14次

❶ 樽味高木遺跡1次　❷ 樽味高木遺跡2次　❸ 樽味高木遺跡3次　❹ 樽味高木遺跡4次　❺ 樽味高木遺跡5次
❻ 樽味高木遺跡7次　❼ 樽味高木遺跡9次　❽ 樽味高木遺跡11次　❾ 樽味高木遺跡13次　❿ 樽味四反地遺跡1次
⓫ 樽味四反地遺跡2～4次　⓬ 樽味四反地遺跡5次　⓭ 樽味四反地遺跡7次　⓮ 樽味四反地遺跡8次　⓯ 樽味四反地遺跡14次
⓰ 樽味四反地遺跡16次　⓱ 樽味遺跡3次　⓲ 樽味遺跡7次Ⅱ区

第２図　　調査地と周辺の主要遺跡分布図（2）

第２章
樽味四反地遺跡15次調査

第２章　樽味四反地遺跡15次調査

１．調査の経過

（１）調査に至る経緯

2006（平成18）年６月、松山市樽味四丁目196番の一部、205番（以下、申請地）における分譲住宅建設工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが地権者より松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「№81　樽味遺物包含地」内にあり、申請地周辺ではこれまでに数多くの調査が行われ、弥生時代や古墳時代を中心とした集落関連遺構が確認されている。特に西約200mの樽味四反地遺跡６・８・13次調査では、弥生時代後期末から古墳時代初頭の大型建物址３棟を検出しており、松山平野で注目されている重要な地域のひとつである。この申請地は同年２月に別の申請者によって既に申請書が提出され、５月26日に埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）によって行っている。

試掘調査は、対象地内にＴ１～５の５本のトレンチを設定した。調査の結果、竪穴式住居や土坑・溝･柱穴を検出し、弥生土器や土師器が出土した。この結果を受け申請者と文化財課･埋文センターは、遺跡の取り扱いについて協議を重ね、工事に伴って消失する遺跡に対し記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、弥生時代から中世における集落構造の解明及び範囲確認を主目的とし、文化財課の指導のもと埋文センターが主体となり同年７月10日より本格調査を開始した。

（２）調査の経緯

調査にあたっては、５ｍメッシュで仮設のグリッドを設置し調査地の区割りを行った。グリッドの名称は、西から東へ１、２、３…５とし、また北から南へＡ、Ｂ、Ｃとして調査を行った。調査終了後において机上で遺構図に国土座標値を合成した。屋外調査の工程は下記のとおりである。

７月10日、仮設事務所を設置するとともに発掘機材や道具の準備を行う。11日まで重機により調査区の表土掘削作業を行う。同時に土層観察用兼排水用のトレンチを調査区南壁下に設定する。12日、調査区内に基準杭を打設する。近隣の発掘現場より水準点（レベル）を移設する。13日、遺構検出状況の写真撮影を行う。撮影終了後、ＳＤ１をグリッド別に掘り下げる。14日、遺構配置図を作成する。25日、ＳＤ１及びＳＫ３の掘り下げが完了する。ＳＰの掘り下げを開始する。26日、昨日に引き続きＳＰの掘り下げを行うと同時に旧河川の掘り下げを開始する。ＳＤ１他の遺構平面図を作成する。28日、遺構の掘削作業がほぼ完了し、南壁・西壁・東壁土層図を作成する。31日、遺構完掘状況の写真撮影を行う。８月１日、コンタ図を作成する。仮設事務所（テント）及び備品を撤去する。２日、重機により調査区を埋め戻す。発掘機材や道具の撤去と引越しを行う。３・４日、出土遺物の整理・洗浄を行う。７～９日、出土遺物の洗浄を行い、全ての屋外作業を終了する。

（３）調査組織

調査地番　　松山市樽味四丁目196番の一部、205番

調査期間　　2006（平成18）年７月10日～８月９日

調査面積　220㎡

調査担当　財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター調査員　山之内志郎

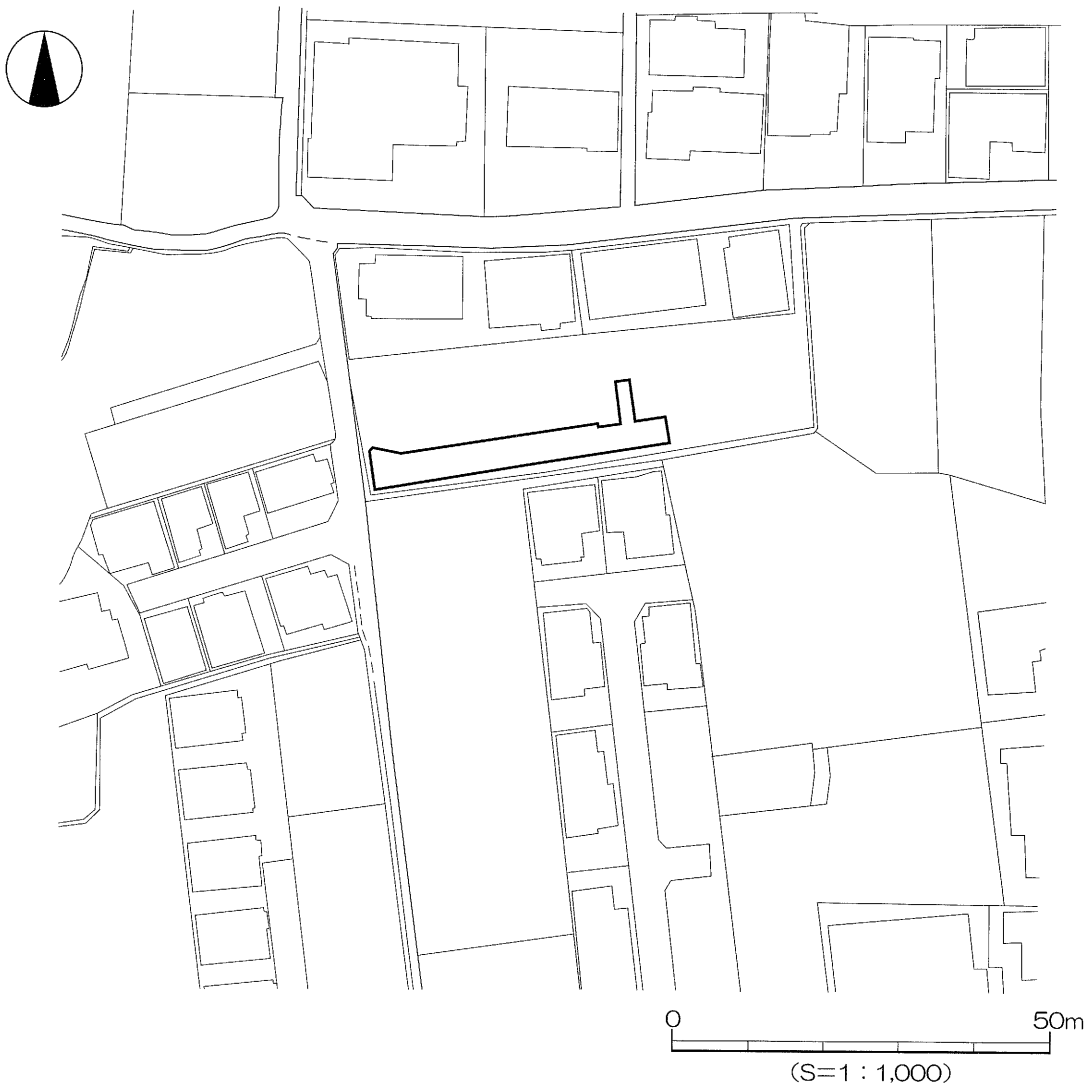
2．層位

（1）基本層位（第4・5図、図版1）

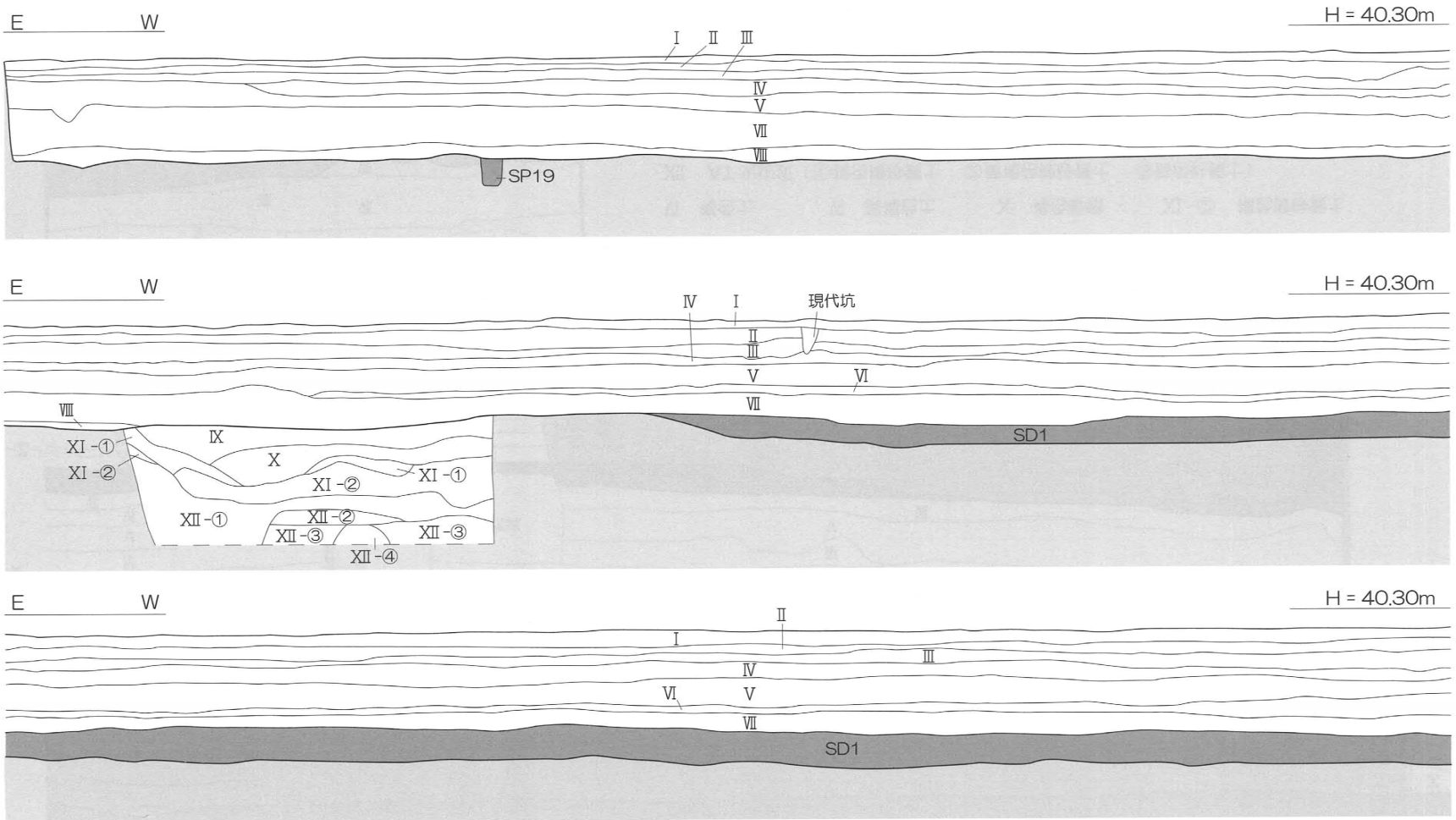
本調査地の基本層位は、第Ⅰ層灰色土（耕作土）、第Ⅱ層灰橙色土、第Ⅲ層橙色土（床土）、第Ⅳ層灰橙色土、第Ⅴ層灰色土（褐色混じり）、第Ⅵ層褐色土（上層にチョコチップ状に硬化土が混じる）、第Ⅶ層灰褐色土、第Ⅷ層暗灰色土、第Ⅸ層黄色微砂質土、第Ⅹ－①層黄褐色微砂質土、第Ⅹ－②層黄色微砂質土、第Ⅹ－③層明褐色微砂質土、第Ⅺ層黄色砂礫である。

第Ⅰ層は水田の耕作土で、厚さ3～15cmを測る。調査区全域に広く堆積する。

第Ⅱ層は第Ⅰ層に橙色が染み込んだ灰橙色土で、厚さ3～15cmを測る。調査区全域に広く堆積するが、北方へ行くほど堆積は薄くなる。



第3図　調査地位置図



南　壁

Ⅰ　灰色土　　Ⅱ　灰橙色土　　Ⅲ　橙色土　　Ⅳ　灰橙色土　　Ⅴ　灰色土（褐色混）

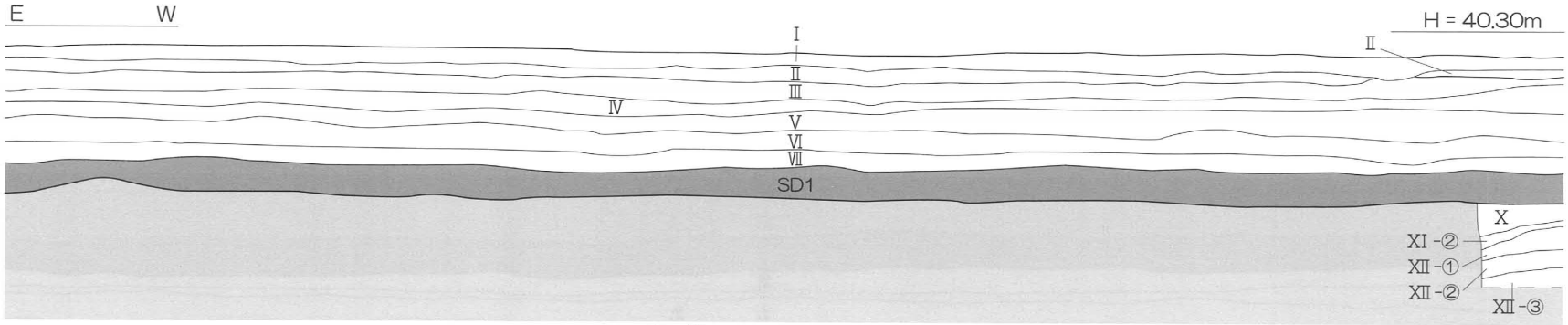
Ⅵ　褐色土　　Ⅶ　灰褐色土　　Ⅷ　暗灰色砂質土

Ⅸ　灰褐色土　　Ⅹ　褐色砂礫　　XI -①　黄色微砂質土　　XI -②　褐色微砂質土

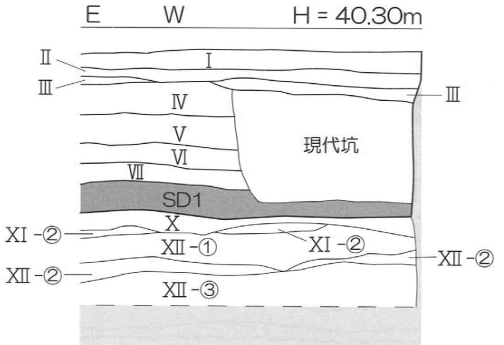
XII　AT 火山灰（①黄色微砂質土　②黄褐色微砂質土　③黄色粘質土　④明褐色微砂質土）

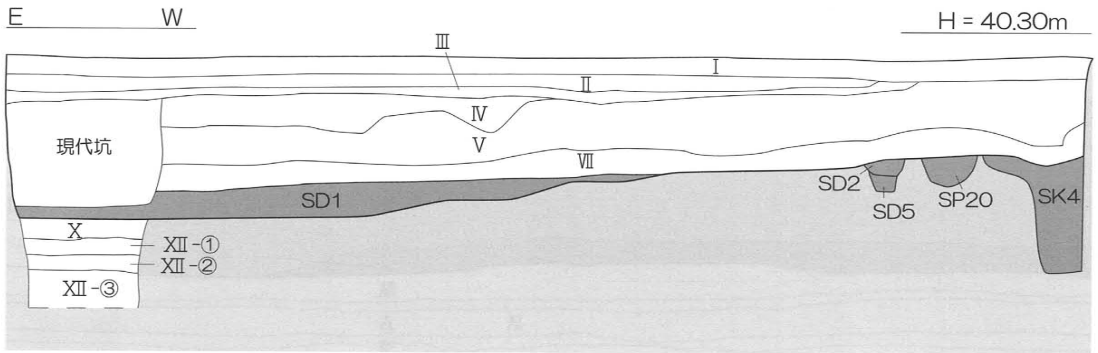
0　2m
(S=1:40)

第４図　　南壁土層図（1）

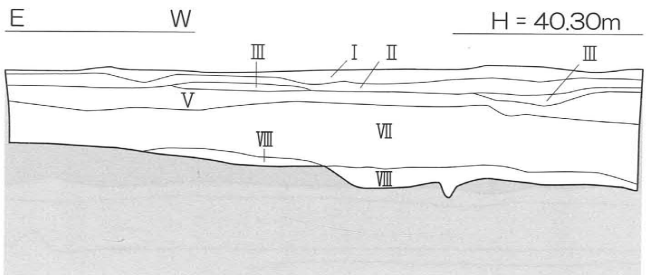


南　壁





西　壁



東　壁

Ⅰ　灰色土　　Ⅱ　灰橙色土　　Ⅲ　橙色土　　Ⅳ　灰橙色土　　Ⅴ　灰色土（褐色混）

Ⅵ　褐色土　　Ⅶ　灰褐色土　　Ⅹ　褐色砂礫　　Ⅺ-②　褐色微砂質土

Ⅻ　AT 火山灰（①黄色微砂質土　②黄褐色微砂質土　③黄色粘質土）

0　2m

(S=1:40)

第 5 図　　南壁土層図（2）、西壁土層図、東壁土層図

第Ⅲ層は水田の床土で、厚さ２～13cmを測る。調査区南部にのみ堆積する。

第Ⅳ層は灰橙色土で、厚さ３～18cmを測る。調査区東壁近くには堆積していない。

第Ⅴ層は褐色混じりの灰色土で、厚さ８～30cmを測る。調査区全域に堆積する。

第Ⅵ層は褐色の包含層で、厚さ３～15cmを測る。調査区東壁近くには堆積しておらず、西方ほど堆積が厚くなる。上層はチョコチップ状に硬い褐色土が堆積している。土師器と瓦器の小片が出土しており、中世の包含層と考えられる。

第Ⅶ層は灰褐色の包含層で、厚さ15～25cm を測る。調査区ほぼ全域に厚く堆積している。土師器の小片が出土しており、古代の包含層と考えられる。

第Ⅷ層は暗灰色土で、厚さ10cm前後で薄く堆積している。調査区西部のみに堆積する。

第Ⅸ層以下は、いわゆる地山と呼ばれる層である。第Ｘ－①～③層は、ＡＴ火山灰の堆積層と考えられる。

なお、調査区東部の第Ⅷ層下面には褐色砂礫と褐色微砂質土が露出した部分があり、当初は遺構の可能性があるとして掘り下げを行ったが無遺物であったことから、遺構ではなく第Ｘ－①～③層以降に堆積した「旧河川」の可能性があると考えられる。全ての遺構は、第Ⅸ層上面で検出した。

（２）検出遺構・遺物

検出した主な遺構は、溝５条、土坑５基、柱穴28基である。そのほか、調査区東半部で時期不明の旧河川を確認した。主な出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・瓦器・石製品・鉄製品などがある。

次項では検出した遺構と出土遺物について詳述するが、時代順ではなく、まず本調査地で中心となる古代の遺構と遺物を説明し、その後古墳時代以前、古墳時代、中世、その他の遺構と遺物の順とする。

３．遺構と遺物

（１）古代の遺構と遺物

古代の遺構は、溝4条を検出した。

１）溝

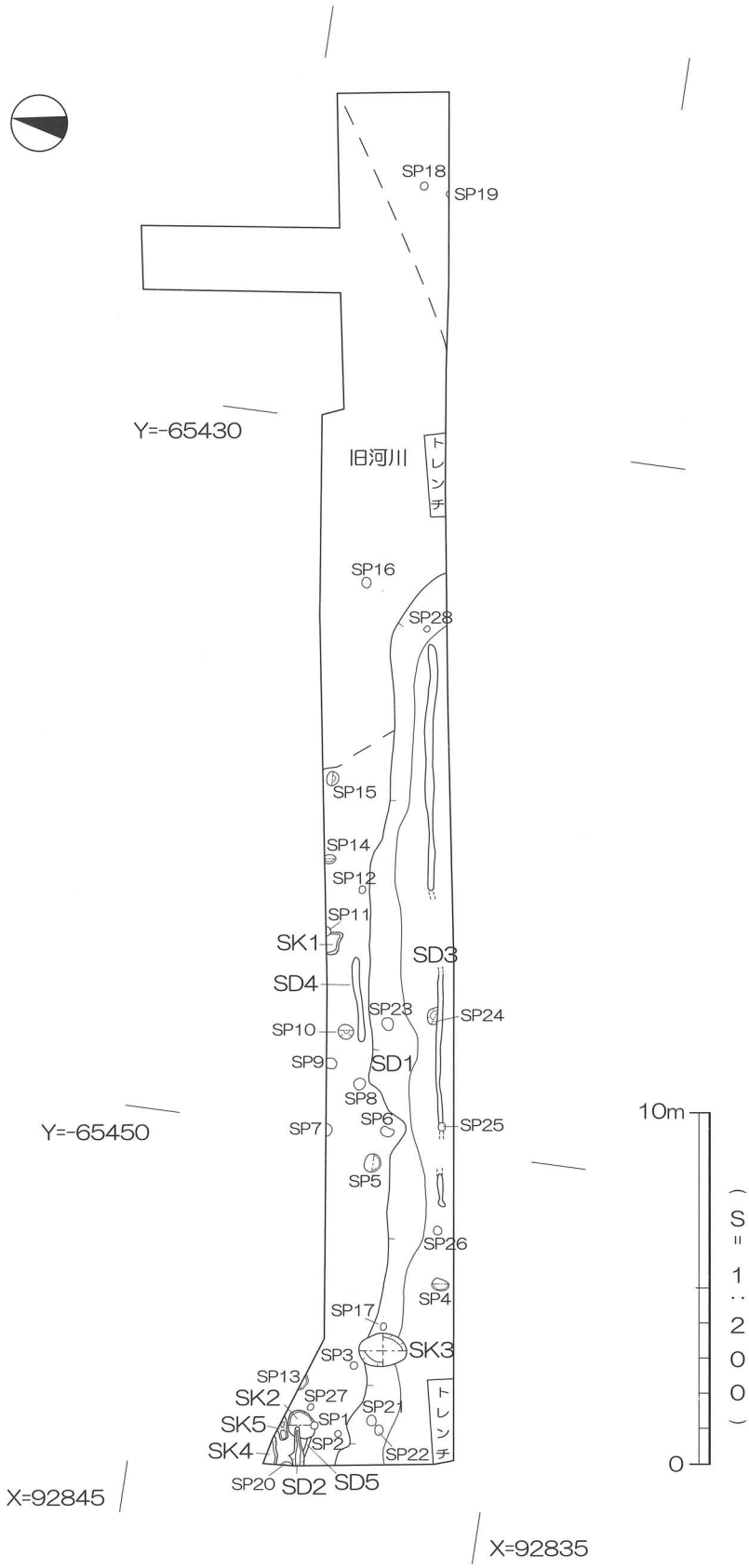
ＳＤ１（第７図、図版２）

調査区南西部に位置する。南壁に沿って東西方向にほぼ直線的に長く伸び、西部は調査区外へ続く。東部は南方向へ屈曲し調査区外へ続くものと思われる。溝南西部でＳＫ３に切られている。第Ⅶ層下面での検出であるが、第Ⅷ層との前後関係は確認できなかった。規模は検出長25.30m、上場幅1.40～3.40m、深さ25cmを測る。断面形態は対岸を検出していないため不明であるが、レンズ状を呈すると考えられる。溝底面は北側から南側へ向けて傾斜している。埋土は灰褐色土の単一層である。溝底面において１条の溝（ＳＤ３）を検出しており、後述する。

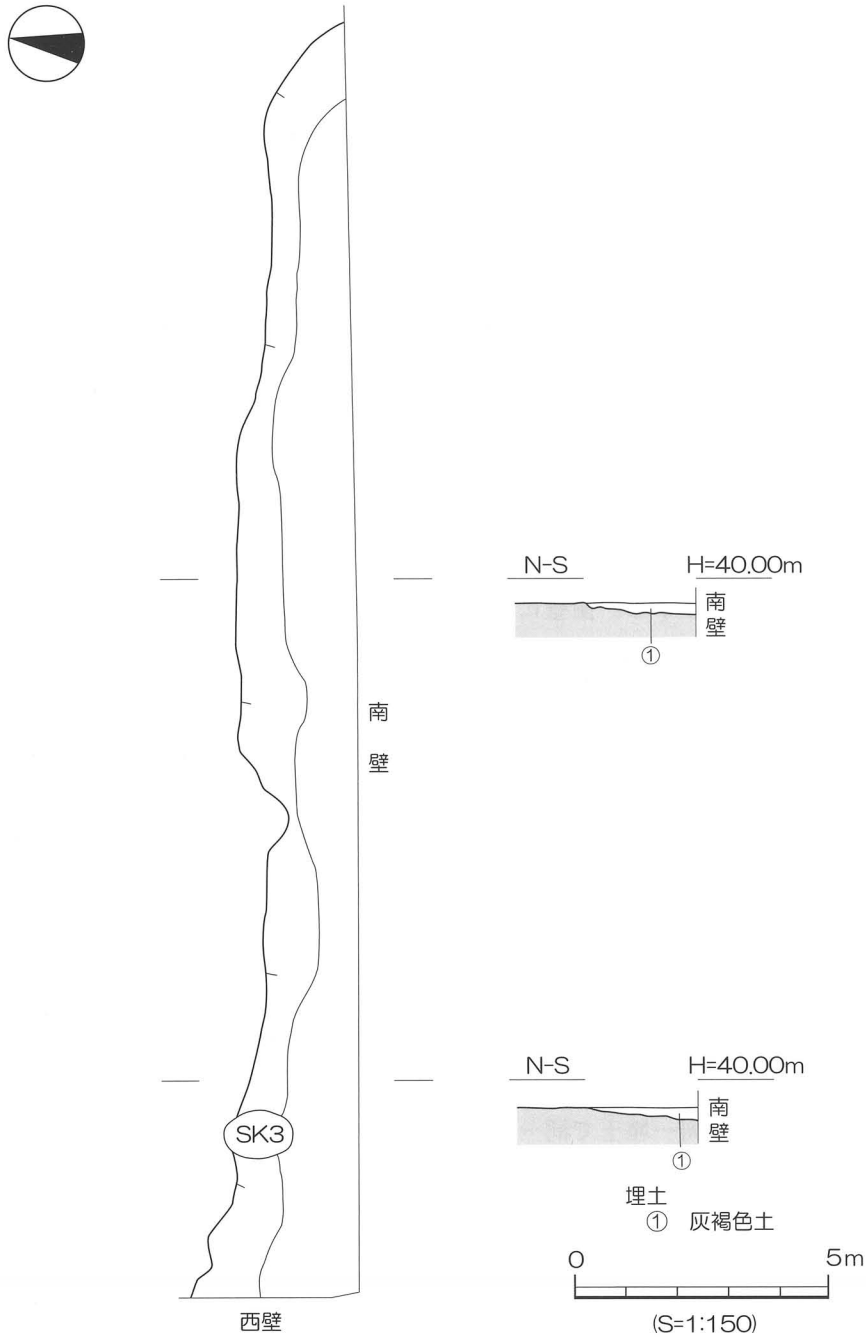
出土遺物（第８～10図、図版４）

ＳＤ１は当調査地内で最も出土遺物の多い遺構であり、遺物は弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・石製品・鉄製品が出土している。

１～12は土師器である。１～４は坏である。平底の底部である。１は底部に回転糸切り痕がみら


SP18
SP19
Y=-65430
旧河川
トレンチ
SP16
SP28
SP15
SP14
SP12
SP11
SK1
SD3
SD4
SP23
SP24
SP10
SD1
SP9
SP8
SP6
SP7
SP25
Y=-65450
SP5
SP26
SP4
SP17
SK3
SP3
SP13
SK2
SP27
SP21
SK5
SP1
SP2
SK4
SP22
トレンチ
SP20
SD2
SD5
X=92845
X=92835
10m
0
(S=1:200)

第 6 図　　遺構配置図



第７図　　SD1 測量図

れる。11世紀後半～12世紀。４は内面に赤色顔料が付着する。７～８世紀。５～８は高台付椀である。内黒の底部に低い高台がつく。全体像がわかりにくいが、11世紀後半と推測される。５・６はやや厚手のつくりである。９・10は皿である。11は坏蓋である。扁平なつまみである。12は高坏の脚部である。13・14は瓦器椀の口縁部である。15・16・89は緑釉陶器である。15は口縁部で、端部は外反し丸くおさめる。16は底部で、細く低い高台である。89は胴部片のため図化はせず巻末図版４にのみ掲載したものである。17は青磁碗である。小さい玉縁状口縁である。

18～38は須恵器である。18～21は坏蓋である。20は口縁端部を丸くおさめる。22～24は坏身である。6世紀代。25・26は坏で、25は口縁部、26は底部である。27～29は高台付坏である。27は細く尖る高台は直立気味に接地する。8世紀中頃。28は「ハ」の字状に開く短い高台。29は小型品。小型瓶の可能性もある。30～32は高坏である。30は脚部に方形と思われる透かしを施す。33は瓶の頸部である。34～38は甕である。34～36は口縁部、37は口縁端部、38は頸部である。

39～40は弥生土器である。39は広口壺の頸部と思われる。貼り付け突帯に布目状押圧痕が残る。40は高坏の基部である。41は台石である。ほぼ完形で、扁平な自然石を利用しており、両面に敲打による窪みが顕著に残っている。42は鉄釘である。釘頂部が破損し、先端部はやや屈曲している。

時期：出土遺物には年代的にばらつきがみられる。最も年代的に古いものは弥生土器で、逆に新しいものでは11世紀後半～12世紀と推測される土師器がみられる。一方、遺構の切り合いをみると、後述するＳＫ３に切られていることから13世紀には既に溝としての機能は停止し陸地化していたと考えられる。よって、これらを総合的に考えると11世紀後半～12世紀に埋没した遺構と考えられる。

ＳＤ２（第６図）

調査区西端部に位置する。南壁に平行して東西方向に伸び、西側は調査区外で未検出である。ＳＫ２とＳＤ５を切っている。規模は、検出長1.13m、上場幅0.15～0.32m、深さ８cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰褐色土の単一層である。

遺物は溝内から須恵器が出土しており、図化できたのは須恵器壺43のみである。

出土遺物（第11図）

43は須恵器の広口壺である。大きく外反し、上下に拡張する口縁部。

時期：出土遺物は古墳時代のものであるが、埋土からＳＤ１と同一時期（11世紀後半～12世紀）に埋没した遺構と考えられる。

ＳＤ３（第12図）

調査区中央南部に位置する。溝上面をＳＤ１埋土が覆っているため、ＳＤ１掘り下げ終了後に検出したものである。南壁に平行して東西方向に一直線上で長く伸びる３条の溝を検出し、途中２ヶ所で途切れるものの同一埋土で同一形状をしているため、１条の遺構として報告する。ＳＰ25により切られ、ＳＰ24を切っている。規模は、途切れる２ヶ所部分を含め検出長16.00m、上場幅0.10～0.25m、深さ６cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は灰褐色土の単一層である。

なお、ＳＤ３の埋土がＳＤ１の埋土と同じであるため本来は同一遺構である可能性も考えられるが、本調査では解明することができなかった。

遺物は溝内から土師器と須恵器が出土しているが、図化できたのは土師器甕44のみである。

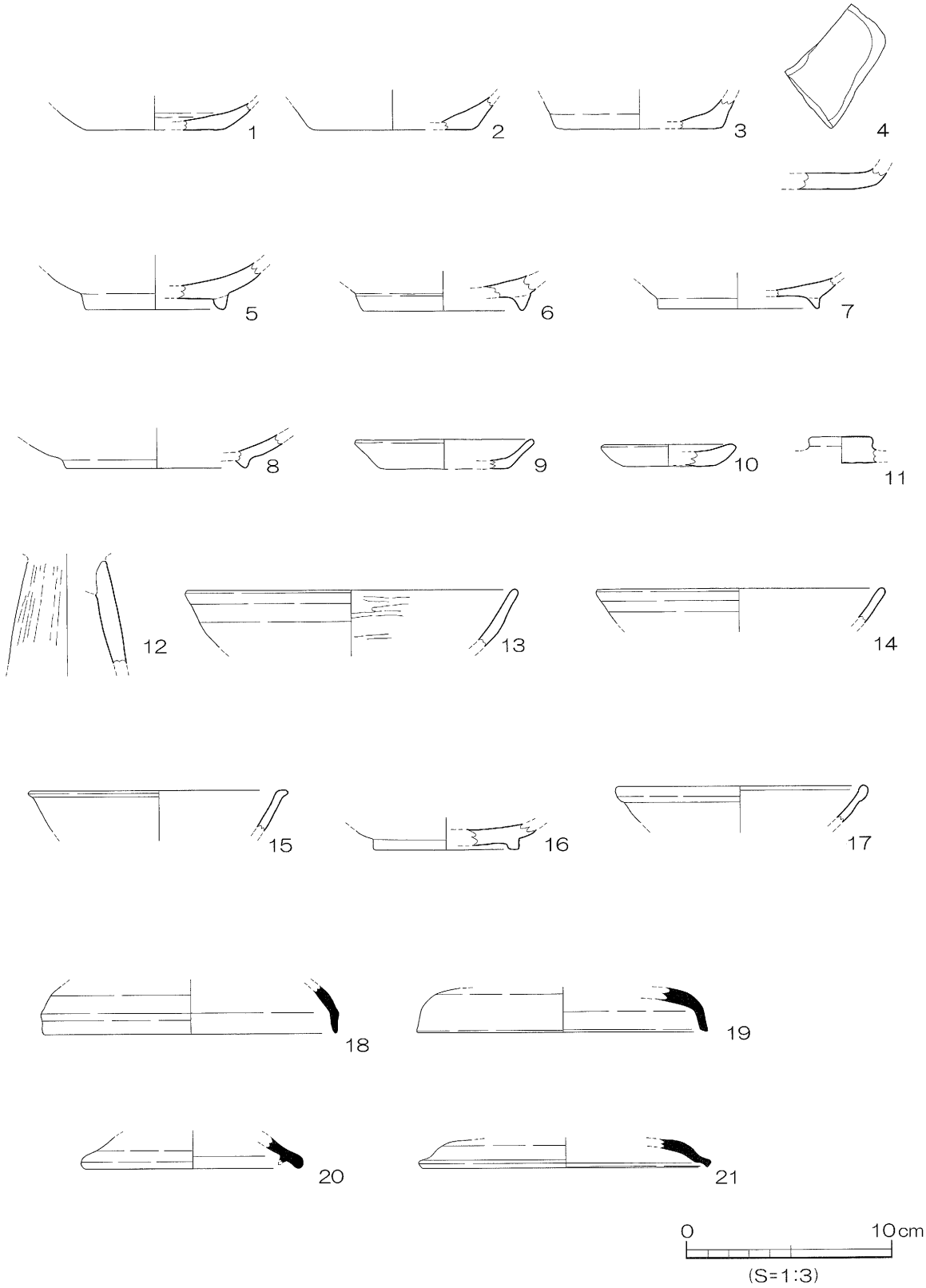
出土遺物（第12図）

44は土師器の甕である。内湾気味に立ち上がる口縁部。

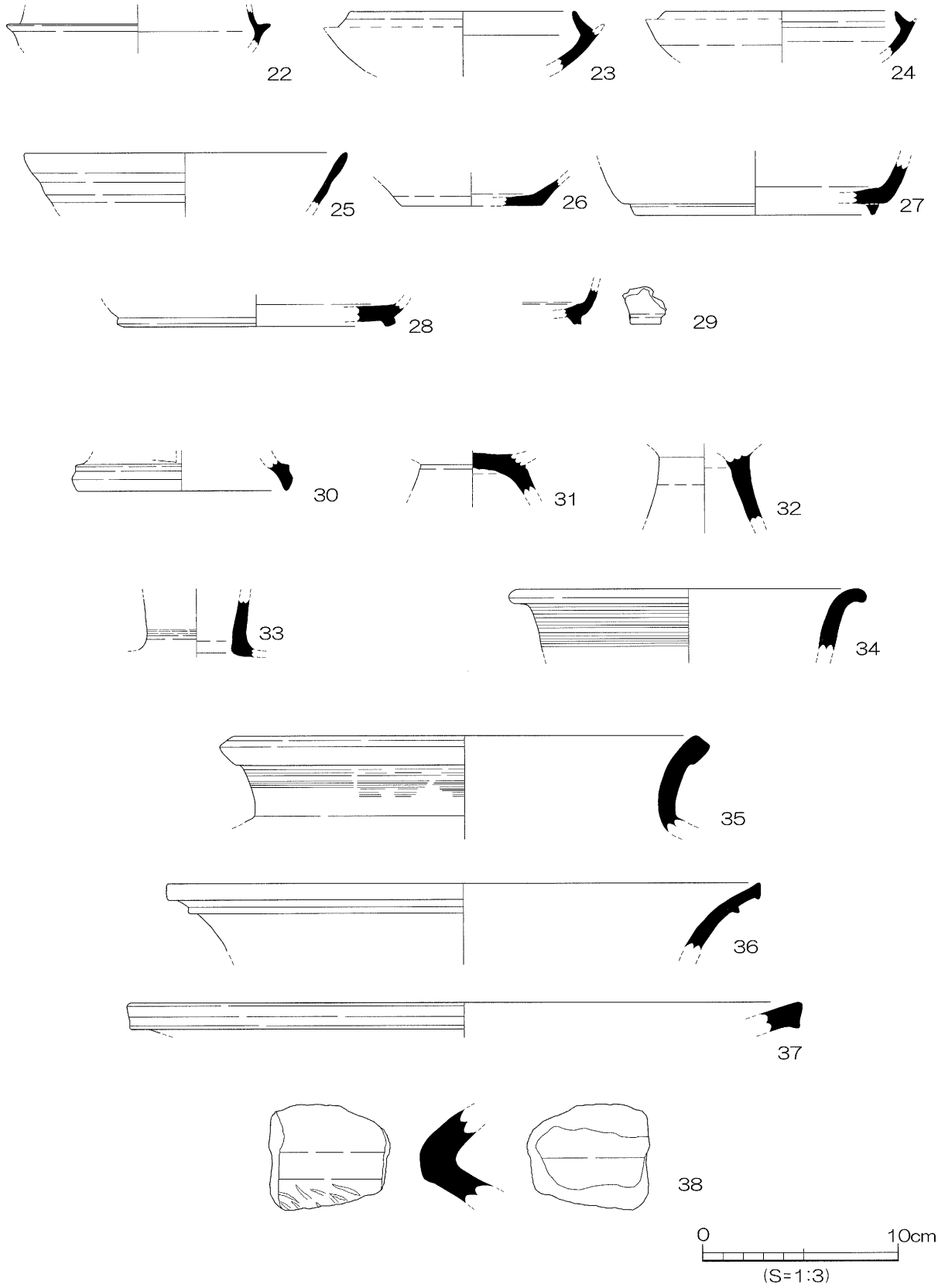
時期：溝上面をＳＤ１埋土が覆っており、かつＳＤ１と埋土が同じであるため、同一時期（11世紀後半～12世紀）に埋没した遺構と考えられる。

ＳＤ４（第12図）

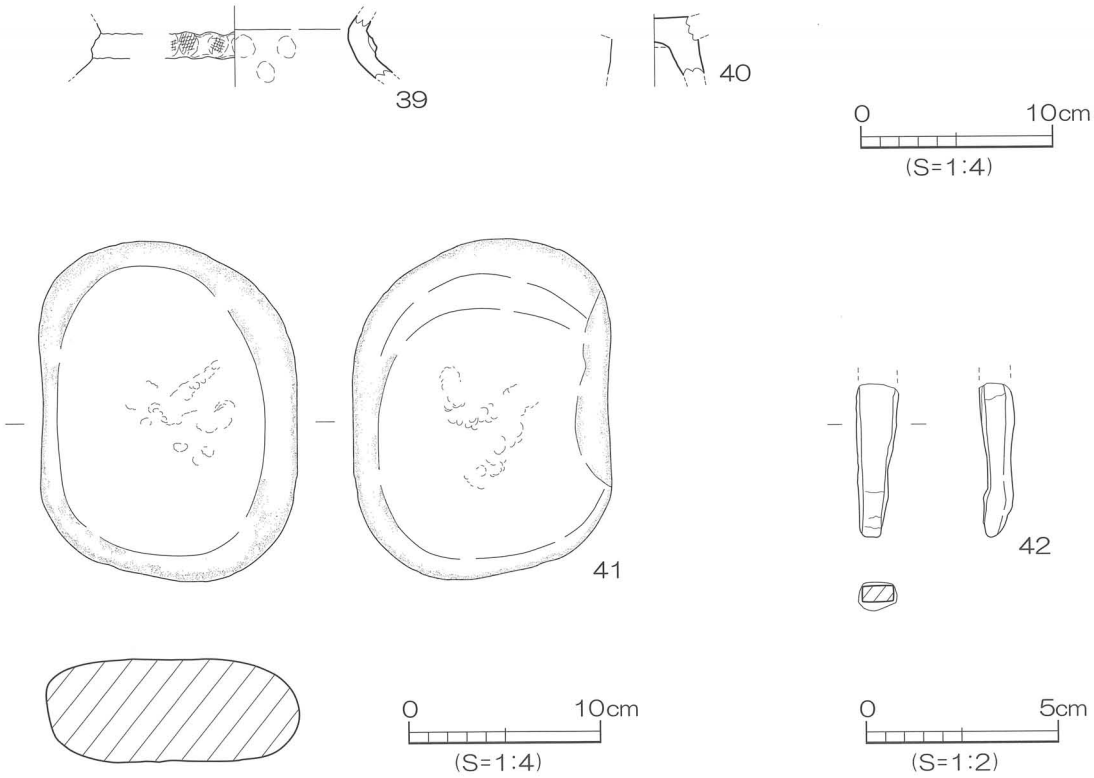
調査区中央北部に位置する。南壁に平行して東西方向に伸び、ＳＤ３の北側2.10～2.20mに位置している。規模は検出長2.40m、上場幅0.15～0.20m、深さ４cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は灰褐色土の単一層である。



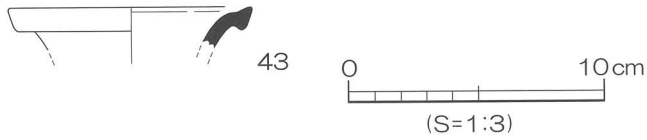
第８図　　SD1 出土遺物実測図（1）



第 9 図　　SD1 出土遺物実測図（2）



第 10 図　　SD1 出土遺物実測図（3）



第 11 図　　SD2 出土遺物実測図

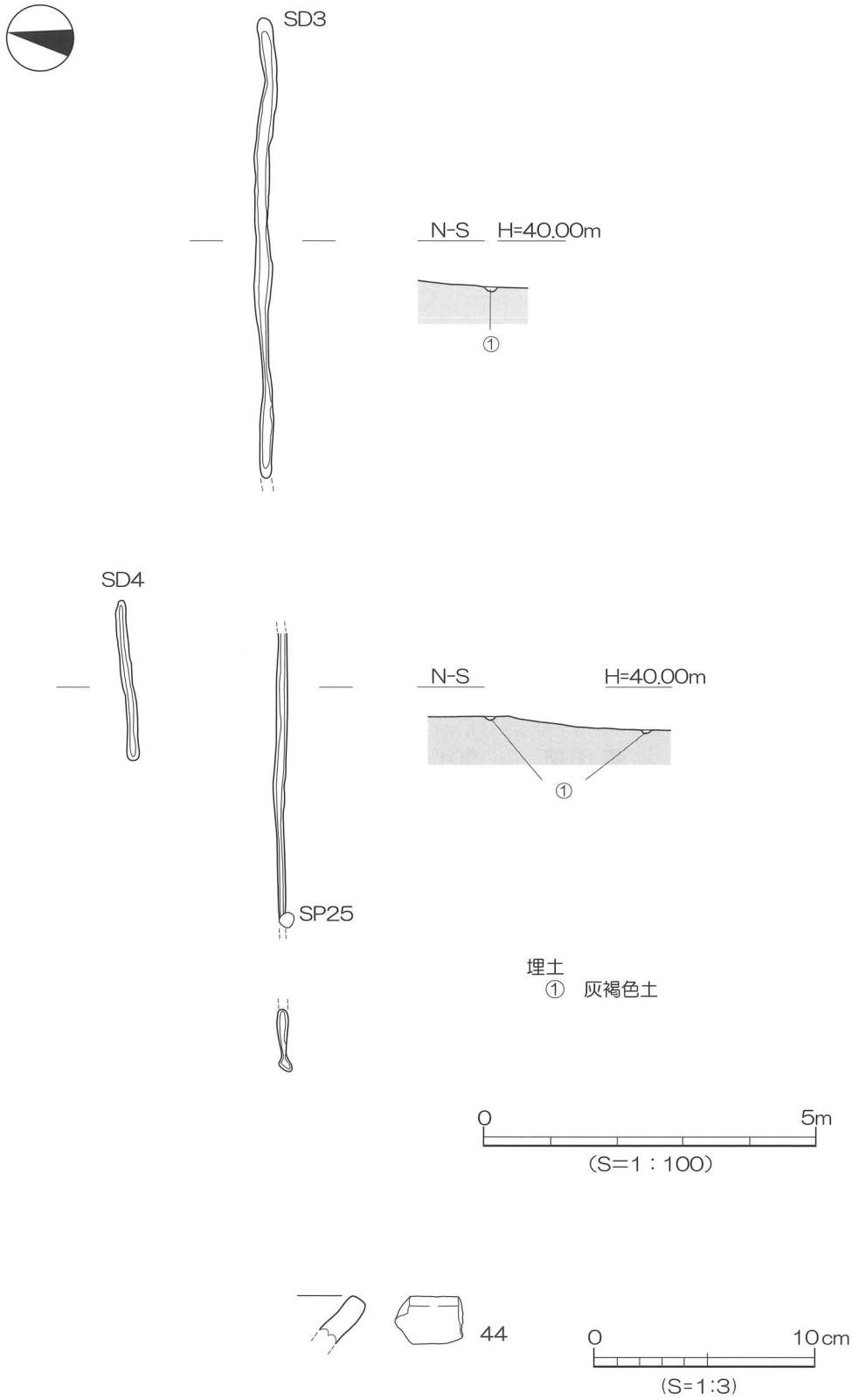
遺物は溝内から土師器が出土しているが、小片であるため図化していない。

なお、ＳＤ３とＳＤ４の関係については、調査段階で土層観察用のベルトで確認した結果、土色が同じであるほか、検出方向や幅・深さなどが類似する溝である点は確認できた。

時期：時期を特定しうる遺物の出土はないが、ＳＤ１と埋土が同じであるため、同一時期（11世紀後半～ 12世紀）に埋没した遺構と考えられる。

（２）古墳時代以前の遺構と遺物

古墳時代以前の遺構は、溝１条を検出した。



第 12 図　　SD3・SD4 測量図、SD3 出土遺物実測図

1）溝

ＳＤ５（第６図）

調査区西部に位置する。南壁に平行して東西方向に伸び、東部をＳＫ２、西部をＳＤ２に切られている。規模は検出長0.86m、上場幅８cm、深さ15cmを測る。断面形態は舟底状を呈する。埋土は黒色土の単一層である。

溝内から遺物は出土していない。

時期：時期を特定しうる遺物の出土がないため明確な時期認定ができないが、後述する古墳時代後期に埋没したＳＫ２に切られているため、古墳時代後期以前に埋没した遺構と考えられる。

（３）古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、土坑2基を検出した。

1）土坑

土坑はＳＫ１～５の５基を検出したが、ここではＳＫ１・２の２基が該当する。

ＳＫ１（第13図、図版２）

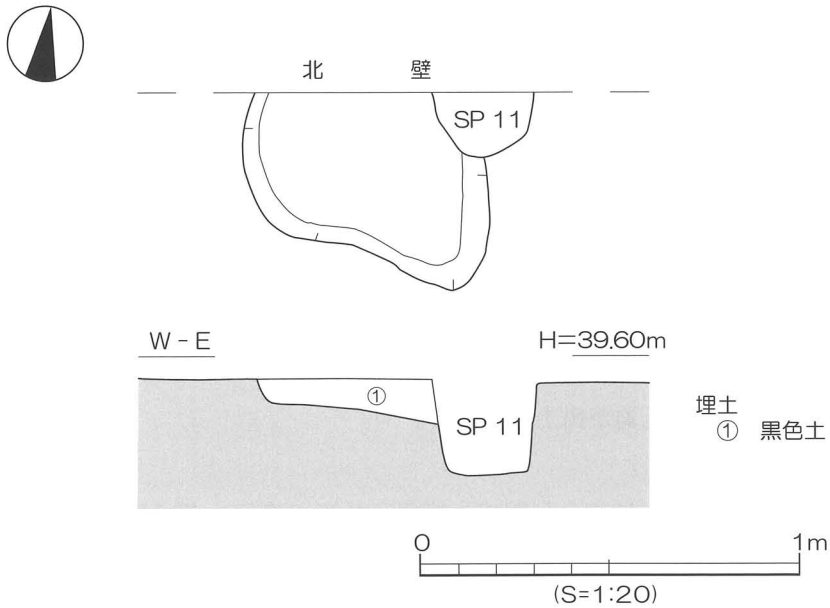
調査区ほぼ中央部に位置する。調査区北壁沿いで検出したため北側は未検出である。またＳＰ11によって東側を切られている。平面形態は不整形、断面形態は皿状を呈し、東側に向けて若干深くなる。検出規模は0.63×0.52m、深さ12cmを測る。埋土は黒色土の単一層である。

土坑内から遺物は出土していない。

時期：遺物は出土していないため即断はできないが、後述するＳＫ２と同一埋土のため６世紀と考えられる。

ＳＫ２（第14図）

調査区北西隅に位置する。西側をＳＤ２、南側をＳＰ１によって切られ、ＳＤ５を切っている。



第 13 図　　SK1 測量図

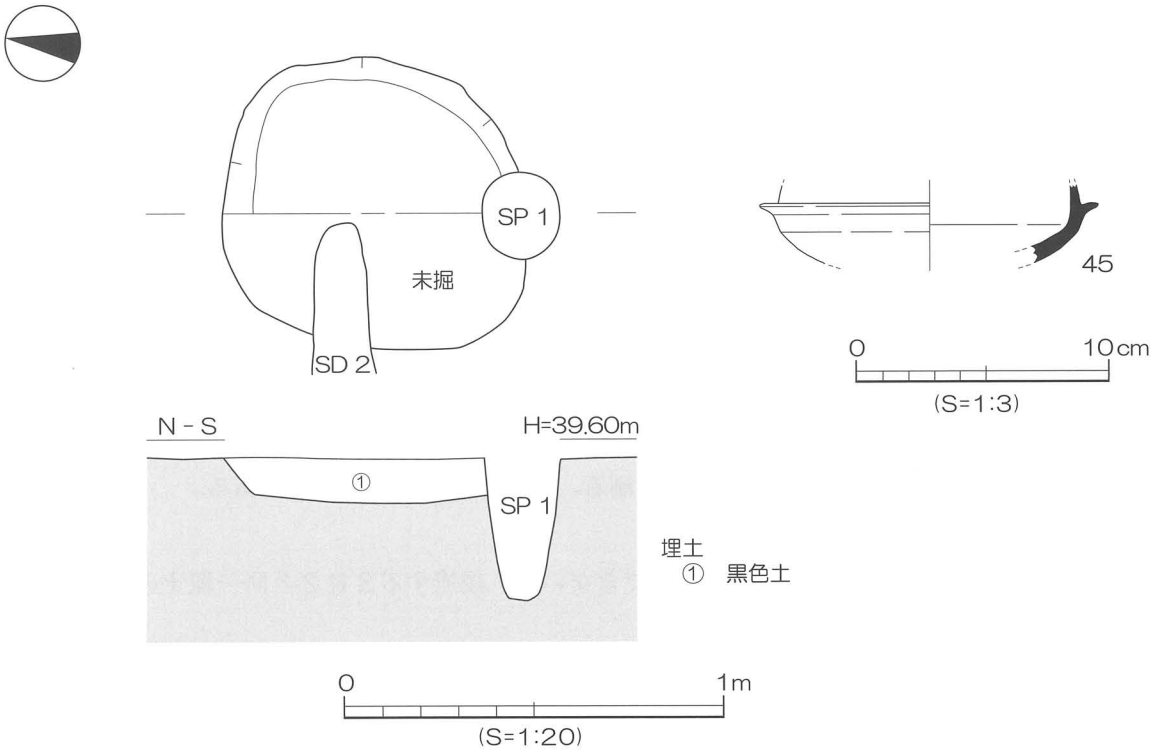
平面形態は楕円形、断面形態は皿状を呈し、中央部が若干深くなる。規模は長軸0.89m、短軸0.79m、深さ12cmを測る。埋土は黒色土の単一層である。

遺物は須恵器が出土しており、図化したのは須恵器坏身45である。

出土遺物（第14図）

45は須恵器の坏身である。受部は水平に伸び、立ち上がりはほぼ直立する。

時期：出土遺物の年代から６世紀前半と考えられる。



第 14 図　　SK2 測量図、出土遺物実測図

（4）中世の遺構と遺物

中世の遺構は、土坑３基を検出した。

1）土坑

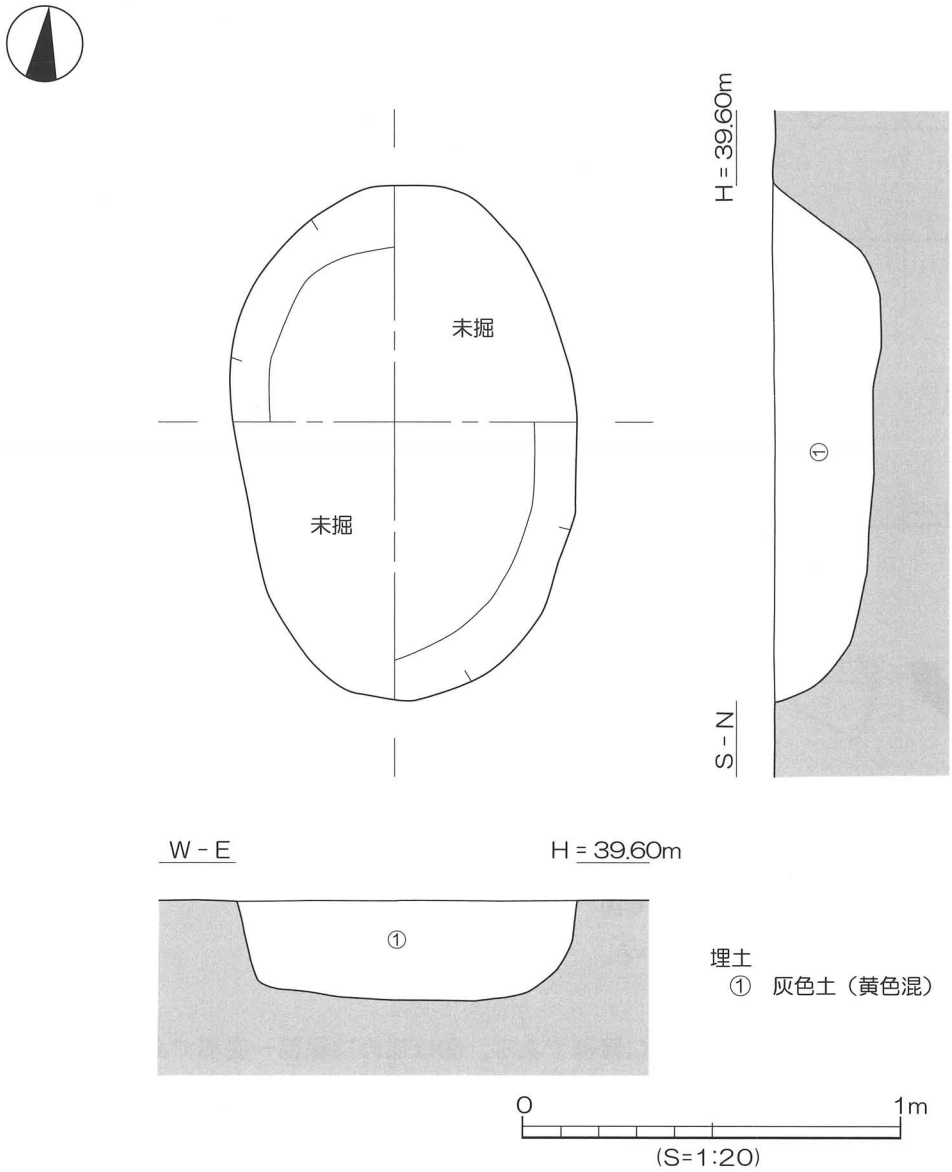
ＳＫ３（第15図、図版３）

調査区西半部に位置する。ＳＤ１を切っている。平面形態は南北方向に長い楕円形、断面形態は「Ｕ」字状を呈し、北部が若干深くなる。規模は長軸1.37m、短軸0.91m、深さ28cmを測る。埋土は黄色混じりの灰色土の単一層である。

遺物は土師器や須恵器・瓦器が出土している。

出土遺物（第16図、図版４）

46・47は土師器である。46は高台付椀で、断面三角形の高台。47は甕で、やや厚手の口縁部。48～50は瓦器椀である。48は全体像がわかる資料で、口縁端部は丸くおさめる。高台はやや細い断面四角形。13世紀代。49は口縁部で、端部は尖り気味におさめる。50は底部である。高台は低い断面四角形。



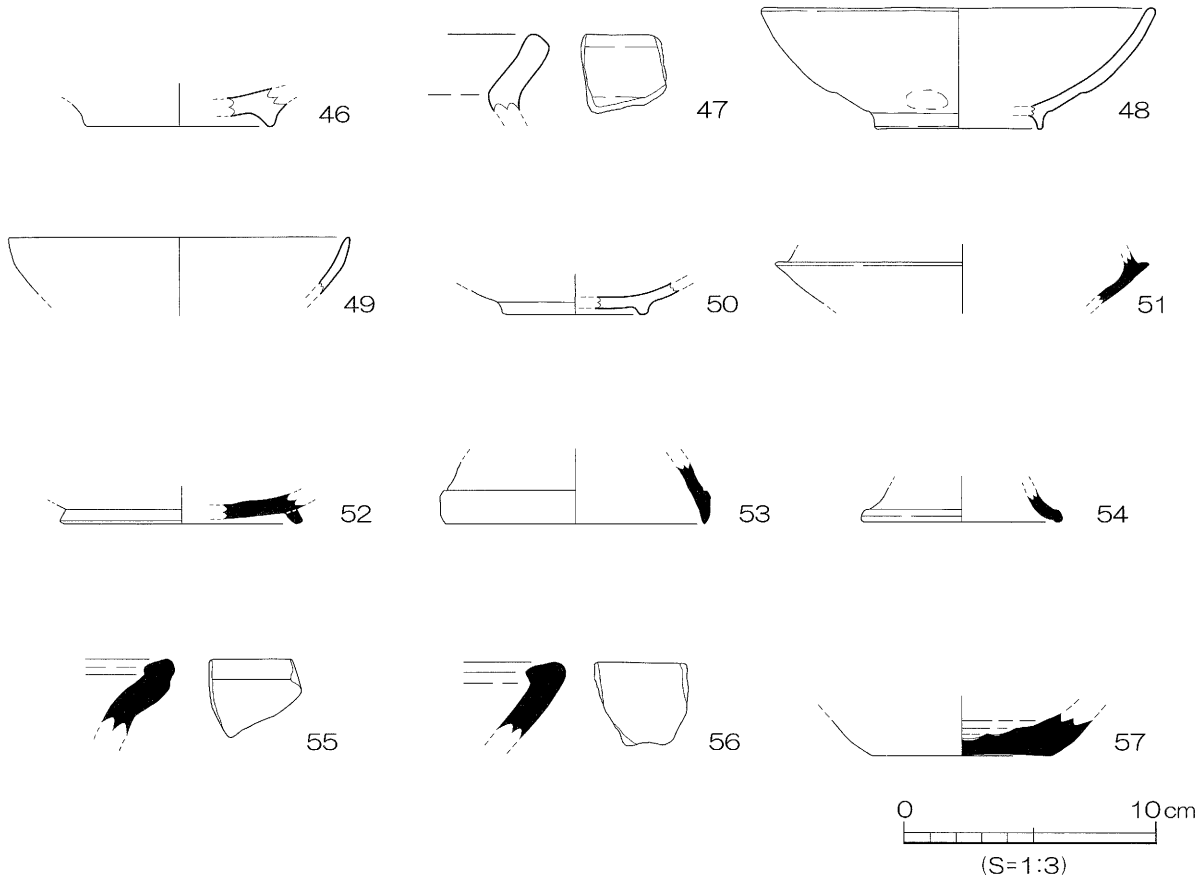
第 15 図　　SK3 測量図

51 ～ 57は須恵器である。51は坏身である。７世紀初頭。52は高台付坏である。「ハ」の字状に開く短い高台。８世紀初頭。53・54は高坏脚部である。55・56は甕の口縁端部である。57はこね鉢の底部である。

時期：出土遺物には年代的にばらつきがあるが、瓦器椀の年代から13世紀に埋没した遺構と考えられる。

ＳＫ４（第17図）

調査区北西隅に位置する。北部及び西部が調査区外で未検出のため平面形態は不明である。断面形態は北壁沿いでは二段掘りを呈しているが、それ以外は一段掘りで垂直近くの角度で掘り下げられている。検出規模は長軸0.80m、短軸0.36m、深さ63cmを測る。埋土は橙色混じりの灰色土の単一層である。



第16図　　SK3出土遺物実測図

遺物は土師器や須恵器が出土している。

出土遺物（第18図、図版４）

58～61は土師器である。58は坏の口縁部である。59は皿の口縁部～底部である。60・61は土釜の脚部片である。60は体部との貼り付け部、61は先端部である。62～64は須恵器である。62は坏身である。63・64は甕で、63は口縁端部、64は肩部である。

時期：土師器坏や皿、土釜の年代から13世紀に埋没した遺構と考えられる。

ＳＫ５（第19図）

調査区北西隅に位置する。東部は調査区外のため未検出である。平面形態は不明であるが、長楕円形と考えられる。断面形態は西部が浅く、東部が深い二段掘りを呈している。検出規模は長軸0.66m、短軸0.28m、深さ27cmを測る。埋土は灰色土の単一層である。

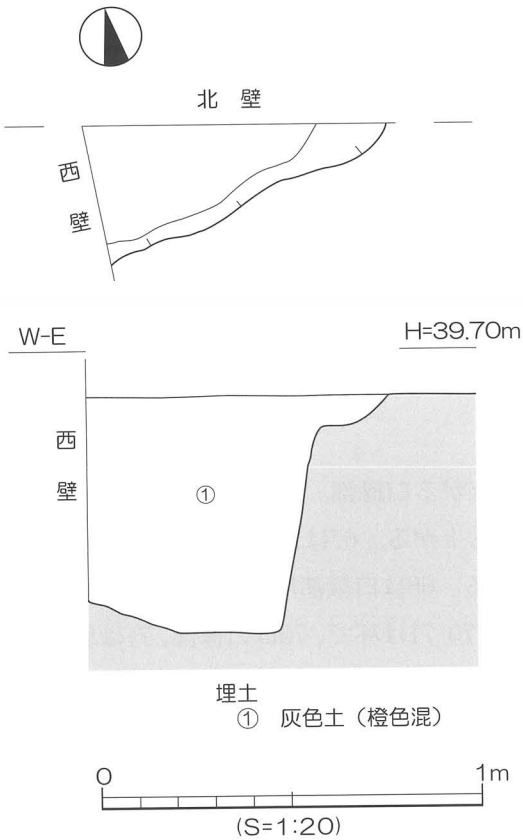
遺物は土師器が出土しているが、小片であるため図化していない。

時期：遺構の埋没年代は決定しがたいが、埋土からＳＫ３・４と同様に13世紀と考えられる。

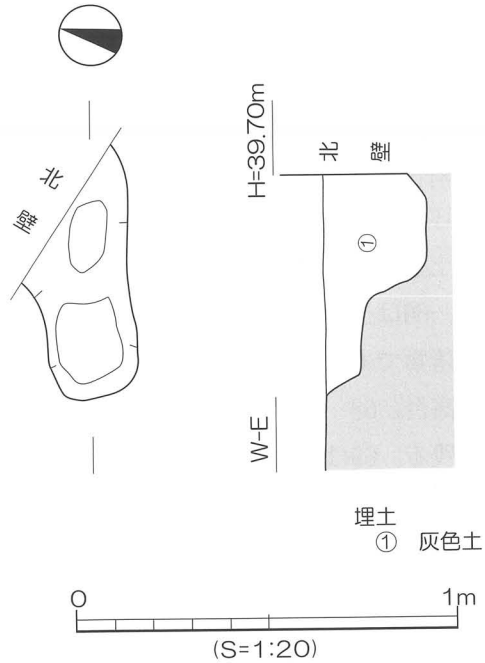
（5）その他の遺構と遺物

調査では、溝や土坑を検出したほか、旧河川１条及び柱穴28基を検出した。以下に、この柱穴からの出土遺物のほか、重機での掘削作業途中などで表採した層位不明な土器を「層位不明遺物」として報告する。

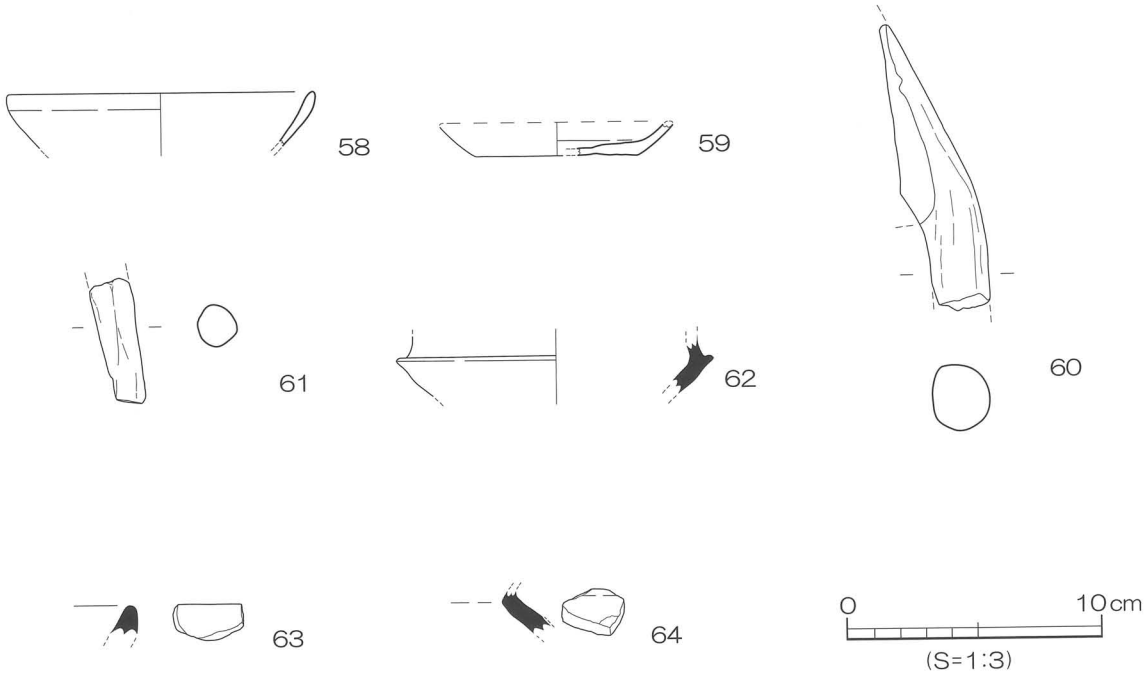
1）旧河川（第６図）



第 17 図　　SK4 測量図



第 19 図　　SK5 測量図



第 18 図　　SK4 出土遺物実測図

調査区東部の第Ⅷ層下面に褐色砂礫と褐色微砂質土が露出した部分があり、当初は遺構の可能性があるとして北壁下にトレンチを設定して掘り下げを行った。その結果、遺物は皆無で、北東側に広範囲に広がっているため、遺構ではなく第Ｘ－①～③層以降に堆積した「旧河川」の可能性があると考えられる。

2）柱穴（第６図、図版２）

柱穴はＳＰ１～28の28基を検出した。埋土で分類すると次の３種（埋土１～３）に分類することができる。埋土１：黒色土…４基、埋土２：灰褐色土…８基、埋土３：灰色土…16基。このうち遺物の図化を行ったのはＳＰ１・４・９・12・21・23からの出土遺物65～74である。これらのうち土師器坏65が出土したＳＰ21については後述する。

出土遺物（第21図、図版４）

65・66は土師器である。65は坏で、内湾気味に立ち上がる口縁部。本調査地で最も遺存状態の良好な遺物である。66は高坏の口縁部で、外反気味に立ち上がる。67は青磁碗である。やや高い削り出し高台。68～74は須恵器である。68・69は坏蓋である。68は口縁部片で、外面に斜め方向の工具痕が残る。69はやや丸みをもった天井部。６世紀中頃。70･71は坏で、70は口縁部、71は底部である。72は高台付坏である。８世紀中頃。73は大型甕の口縁端部である。端部内面はナデ凹む。74はこね鉢の口縁部である。

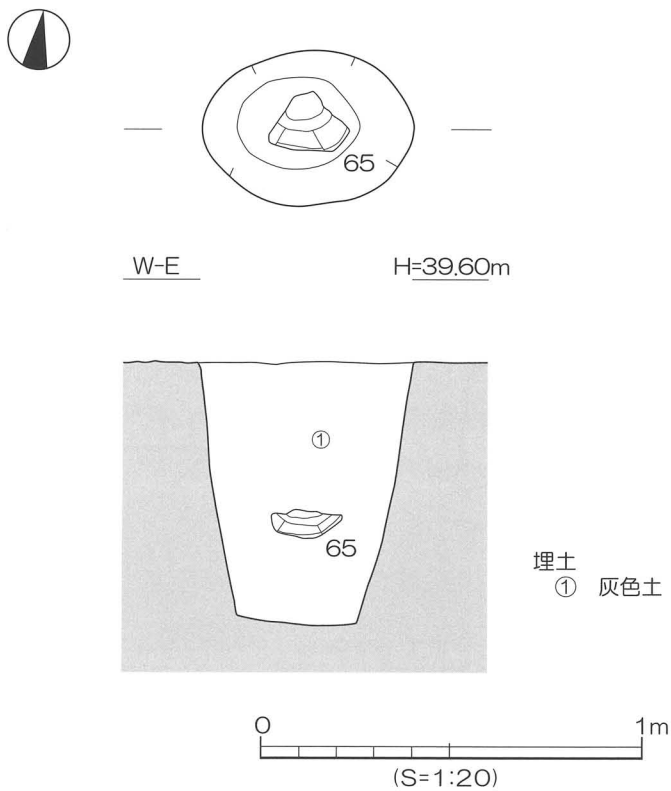
ＳＰ21（第20図、図版３）

調査区西半部に位置する。ＳＤ1を切っている。平面形態は東西方向に長い楕円形、断面形態は「Ｕ」字状を呈している。規模は短軸0.23m、短軸0.21m、深さ35cmを測る。埋土は灰色土である。遺物は土師器や須恵器が出土しており、図化した土師器坏65は柱穴中位に伏せた状態で出土しているため、柱を抜き取った後に埋め戻す際に土器を埋めたものと推測される。

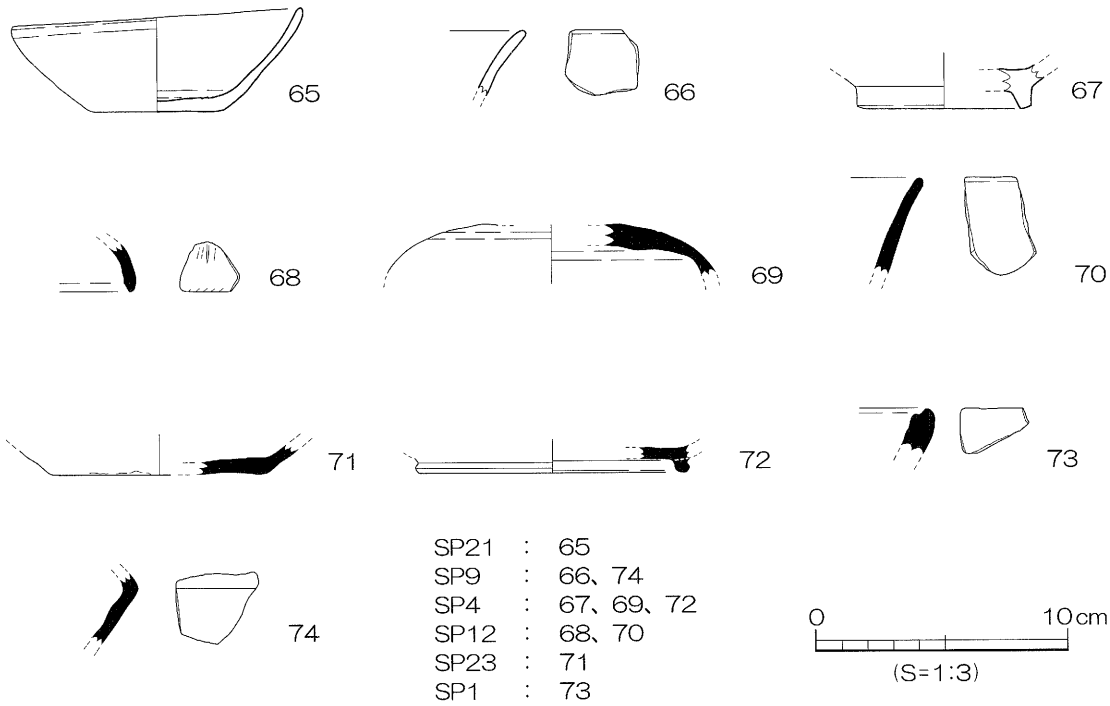
時期：土師器坏65の年代から13世紀に埋没した遺構と考えられる。

3）層位不明遺物（第22図、図版４）

75～78は土師器である。75は高台付椀である。磨耗が著しい。76は土鍋の口縁部である。外面に炭素が付着する。13世紀後半。77・78は土釜である。77は体部、78は先端部片である。79は瓦器椀の口縁部である。80は緑釉陶器である。削り出し高台。81～85は須恵器である。81は坏蓋の口縁部である。82～85は高台付坏である。84・85は器壁が厚いため、長頸壺の底部である可能性もある。86は弥生土器の高坏である。87・88は石製品である。87は砥石である。片面に磨面がみられる。88は台石である。両面に敲打痕が顕著にみられる。



第 20 図　　SP21 測量図



第 21 図　　SP 出土遺物実測図

4．小　結

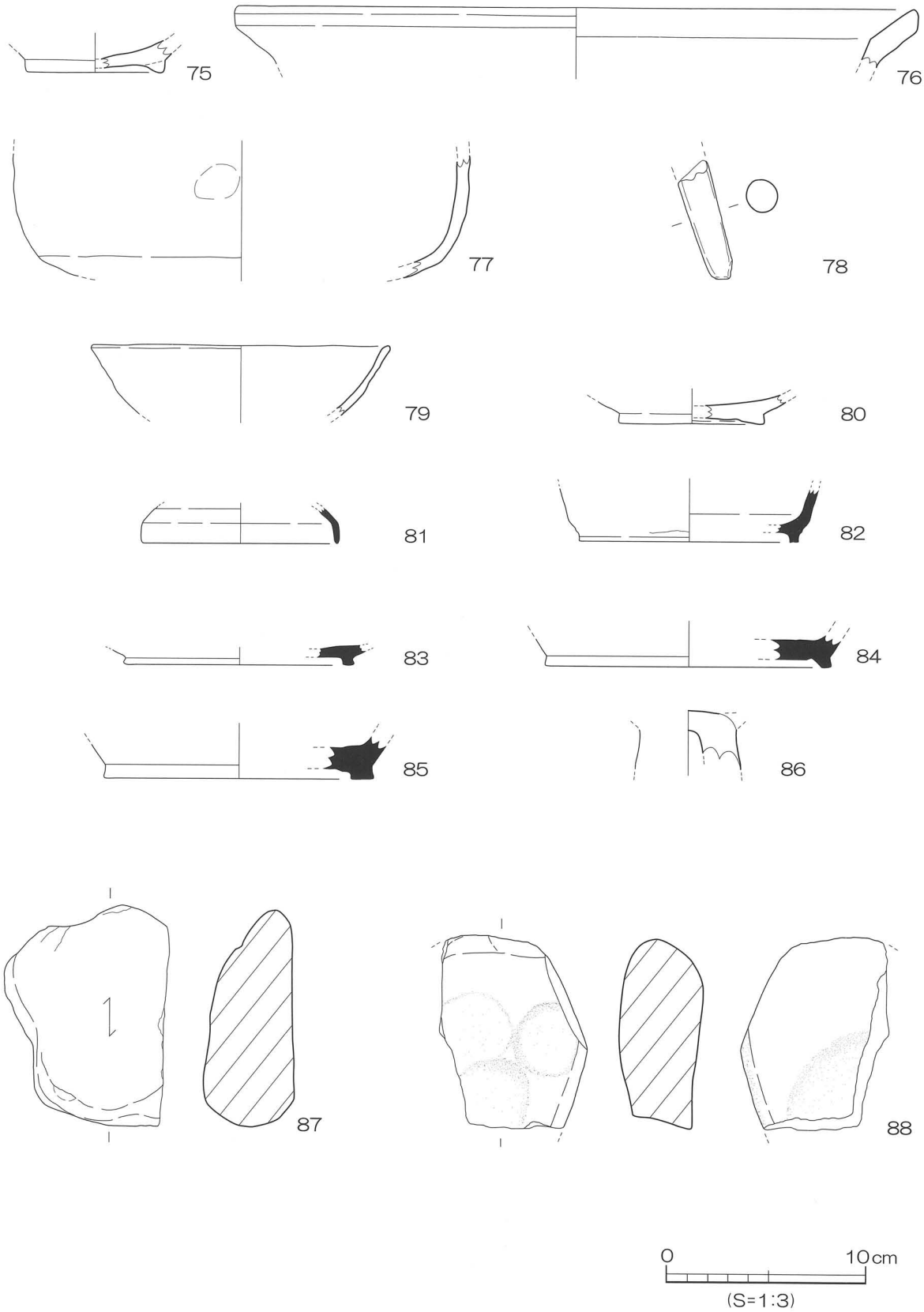
今回の調査では、弥生時代から中世における集落の構造解明を主目的として調査を実施した。その結果、主に古墳時代や古代末から中世の遺構と遺物を確認することができた。狭小な調査区であったにもかかわらず、多量の遺物が出土するとともに数多くの成果を得ることができた。これらについて列挙することでまとめとしたい。

まず遺構では、古代末に埋没したと推定されるＳＤ１がある。調査区の都合により南半部を確認できなかったが、今回検出した北半部から推定復元すると上場幅2.5 ～ 3.0m程度の溝と考えられる。その用途については今後解明を進めていかなくてはならないが、集落域を区画するための溝である可能性が高い。その解明を進めていく上ではＳＤ３・４との関係についても考慮しておく必要があろう。

そのほかの遺構としては、28基の柱穴を確認している。本調査地内では掘立柱建物を復元できる配置での検出はなかったが、今後の周辺地域での調査において掘立柱建物が検出されると、当時の集落域を復元できる可能性が高い。

次に遺物のうち特筆すべきものは、緑釉陶器が挙げられる。緑釉陶器は当時畿内から搬入された貴重品であり、時期決定が可能な点からも貴重な遺物として注目されている。その他、土師器や瓦器などの生活用品は当時の人々の暮らしぶりを知る上で参考になるものである。

このように、本調査地周辺では近年松山市道樽味溝辺線道路工事に伴う調査などにより、古墳時代をはじめとして新しい発見が相次いでいる。今後も周辺域における調査を進めることにより、弥生時代や古墳時代のみならず、古代や中世における集落の構造とその変遷の解明が急務となると考えられる。



第 22 図　　層位不明遺物実測図

遺物一覧　－凡例－

(1) 以下の表は、本調査地検出の遺物の計測値及び観察一覧である。

(2) 遺物観察表の各記載については下記のとおりとする。

法　量　欄　（　　）：復元推定値

調　整　欄　土器の各部位名称を略記した。

例）口→口縁部、口端→口縁端部、胴→胴部、体→体部、脚→脚部、底→底部、坏→坏部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土。

（　　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（１～４）→１～４mm大の石英・長石を含む。

焼成欄の略記について。

例）◎→良好、○→良、△→不良

表2　溝一覧

溝（ＳＤ）	地区	断面形	方向	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	出土遺物	時　期	備　考
1	南西部	レンズ状	東西	(25.30)×1.40～3.40×0.25	灰褐色土	土師器・須恵器ほか	11世紀後半～12世紀	SK3に切られる
2	西端部	皿状	東西	(1.13)×0.15～0.32×0.08	灰褐色土	須恵器	11世紀後半～12世紀	SK2・SD5を切る
3	中央南部	レンズ状	東西	16.00×0.10～0.25×0.06	灰褐色土	土師器・須恵器	11世紀後半～12世紀	SP25に切られる、SP24を切る
4	中央北部	レンズ状	東西	2.40×0.15～0.20×0.04	灰褐色土	土師器	11世紀後半～12世紀	
5	西部	舟底状	東西	(0.86)×0.08×0.15	黒色土		古墳時代後期以前	SD2・SK2に切られる

表3　土坑一覧

土坑（ＳＫ）	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	出土遺物	時　期	備　考
1	中央部	不整形	皿状	(0.63)×(0.52)×0.12	黒色土		6世紀	SP11に切られる
2	北西隅	楕円形	皿状	0.89×0.79×0.12	黒色土	須恵器	6世紀	SD2・SP1に切られる SD5を切る
3	西半部	楕円形	U字状	1.37×0.91×0.28	灰色土	土師器・須恵器・瓦器	13世紀	SD1を切る
4	北西隅	不明	二段掘り	(0.80)×(0.36)×0.63	灰色土	土師器・須恵器	13世紀	
5	北西隅	長楕円形	二段掘り	(0.66)×(0.28)×0.27	灰色土	土師器	13世紀	

表4　ＳＤ１出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器　種	法量(cm)	形　態　・　施　文	調　整 外　面	調　整 内　面	色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
1	坏	底径 (6.8) 残高 1.3	底部片。	ナデ〔底面〕回転糸切り→工具圧痕	回転ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	密 ◎		
2	坏	底径 (7.8) 残高 1.6	底部片。	マメツ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	密 ◎		
3	坏	底径 (8.2) 残高 1.4	平底の底部。	ナデ〔底面〕マメツ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石(1) ◎		
4	坏	残高 1.0	平底の底部。内面に赤色顔料が付着。	ヨコナデ	ミガキ	明赤褐色 明赤褐色	石・長(1) ◎	赤色顔料	
5	高台付椀	底径 (6.8) 残高 2.3	やや厚い断面三角形の高台。内黒。	マメツ〔底面〕ナデ	ミガキ	浅黄色 黒色	石・長(1～2) ◎		4
6	高台付椀	底径 (7.8) 残高 1.5	断面三角形の高台。内黒。	マメツ〔底面〕ナデ	ナデ	浅黄橙色 黒色	長(1) ◎		

ＳＤ１出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
7	高台付椀	底径 (7.8) 残高 1.5	断面三角形の高台。内黒。	マメツ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	密 ○		
8	高台付椀	底径 (8.8) 残高 1.6	断面三角形の高台。内黒。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 黒褐色	密 ◎		
9	皿	口径 (8.8) 底径 (6.4) 器高 1.5	立ち上がりは短く、浅いつくりである。口縁端部は丸くおさめる。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 灰白色	石(1) ◎		4
10	皿	口径 (6.7) 底径 (4.6) 器高 1.1	口縁部の立ち上がりは低く、厚手のつくりである。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	密 ◎		
11	坏蓋	残高 1.3	宝珠つまみ。	ナデ	ナデ	明黄褐色 明黄褐色	密 ◎		
12	高坏	残高 5.1	三角錐の柱部。	ハケ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	密 ◎		
13	椀	口径(16.4) 残高 2.8	瓦器椀の口縁部片。	ナデ	ミガキ	灰色 灰色	密 ◎		
14	椀	口径(14.2) 残高 1.7	瓦器椀の口縁部片。	ナデ	マメツ	淡黄色 灰白色	密 ◎		
15	椀	口径 (6.4) 残高 2.0	緑釉陶器。やや硬質で、口縁部内外面ともに釉を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰オリーブ色	密 ◎	緑釉	4
16	碗	底径 (7.1) 残高 1.2	緑釉陶器。やや硬質で、底部内外面ともに釉を施す。削り出しの円盤高台。	ナデ→施釉 〔底面〕回転ヘラケズリ	ナデ→施釉	灰白色 灰白色	密 ◎	緑釉	4
17	碗	口径(12.4) 残高 1.8	玉縁状口縁。灰白色の釉がかかる。	ナデ→施釉	ナデ→施釉	明緑灰色 明緑灰色	微砂粒 ◎	青磁	
18	坏蓋	口径(14.6) 残高 2.4	口縁部は外反し、端部は尖り気味におさめる。	回転ナデ	ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		
19	坏蓋	口径(14.4) 残高 2.1	口縁部はやや外反し、端部は内傾し面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰白色	微砂粒・密 ◎		
20	坏蓋	口径(11.0) 残高 1.6	口縁部は短く下方に屈曲し、端部は丸くおさめる。かえりは端部より下がった位置につく。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
21	坏蓋	口径(14.4) 残高 1.4	口縁部は短く屈曲し、端部は尖る。	回転ナデ	回転ナデ	黄灰色 黄灰色	密 ◎		
22	坏身	残高 1.9	受部は水平に短く伸び、端部は丸くおさめる。立ち上がりは内傾する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		
23	坏身	口径(11.2) 残高 3.1	立ち上がりは内傾し、端部は丸くおさめる。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 明青灰色	密 ◎		
24	坏身	口径(11.8) 残高 2.3	受部は水平に短く伸び、立ち上がりは内傾し、尖り気味におさめる。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
25	坏	口径(16.4) 残高 2.7	口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		
26	坏	底径 (7.2) 残高 1.4	口縁部は底部より直線的に立ち上がる。	ナデ 〔底面〕回転糸切り	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
27	高台付坏	底径(12.1) 残高 2.7	短い高台は尖り気味に接地する。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ○		
28	高台付坏	底径(14.1) 残高 1.2	短い高台は水平に接地する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
29	高台付坏	残高 1.9	短い高台は水平に接地する。小型品。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1～2)		
30	高坏	口径(10.6) 残高 1.6	脚部片。端面は尖り気味に下方に接地する。透かしあり。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		
31	高坏	残高 2.1	柱部の基部。内面中央に径5mmほどの凹みを有する。	回転ナデ	ナデ	灰色 青灰色	長(1～3) ◎		
32	高坏	残高 3.6	柱部片。	ナデ	ナデ(施釉)	オリーブ灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
33	瓶	残高 3.0	直立する頸部。内外面に自然釉が付着する。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
34	甕	口径(18.2) 残高 3.2	口縁部は外反しながら立ち上がり、端部は丸く仕上げる。	〔口端〕回転ナデ カキメ	回転ナデ	灰色 灰色	長(1～2) ◎		4
35	甕	口径(24.9) 残高 4.9	口縁部は短く直立したのち外反し、端部は肥厚して「コ」の字状を呈する。	〔口端〕回転ナデ カキメ	自然釉	灰・オリーブ色 灰・暗オリーブ色	長(1～2) ◎	自然釉	4
36	甕	口径(30.1) 残高 3.5	口縁部は大きく外反し、上下方に拡張する。端部は面をなす。	回転ナデ 〔口端〕自然釉	自然釉	褐灰色 灰色	長(1～3)ウンモ ◎	自然釉	
37	甕	口径(34.4) 残高 1.6	口縁部は下方に拡張する。端部は面をなす。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	オリーブ灰色 オリーブ灰色	密 ◎		
38	甕	残高 5.3	大型甕の頸部～肩部片。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	石・長(1) ◎		

ＳＤ１出土遺物観察表　土製品

(3)

番号	器　種	法量(cm)	形　態　・　施　文	調　整 外　面	調　整 内　面	色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
39	壺	残高　3.3	弥生土器。頸部に突帯を貼り付ける。	ナデ	ナデ(指頭痕)	黄橙色 黄橙色	石・長(1～2) ◎		
40	高坏	残高　3.1	弥生土器。高坏の基部。	マメツ	マメツ	橙色 浅黄橙色	石・長(1～4) ◎		

表5　ＳＤ１出土遺物観察表　石製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量 長さ(cm)	法　量 幅(cm)	法　量 厚さ(cm)	法　量 重さ(g)	備考	図版
41	台石	ほぼ完形	砂岩	17.9	13.4	5.50	2,198.70		

表6　ＳＤ１出土遺物観察表　鉄製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量 長さ(cm)	法　量 幅(cm)	法　量 厚さ(cm)	法　量 重さ(g)	備考	図版
42	釘	約1/2	鉄	4.1	1.2	1.1	5.45		

表7　ＳＤ２出土遺物観察表　土製品

番号	器　種	法量(cm)	形　態　・　施　文	調　整 外　面	調　整 内　面	色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
43	壺	口径　(9.6) 残高　1.7	口縁部は短く屈曲し、上下方に拡張する。内外面に自然釉が付着する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	暗オリーブ灰色 灰色	密 ◎	自然釉	

表8　ＳＤ３出土遺物観察表　土製品

番号	器　種	法量(cm)	形　態　・　施　文	調　整 外　面	調　整 内　面	色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
44	甕	残高　2.1	内湾気味に立ち上がる口縁部。口縁端部は「コ」の字状。	ヨコナデ	ヨコナデ	黒褐色 にぶい褐色	石・長(1～2) ウンモ ◎		

表9　ＳＫ２出土遺物観察表　土製品

番号	器　種	法量(cm)	形　態　・　施　文	調　整 外　面	調　整 内　面	色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
45	坏身	残高　3.5	受部は水平に伸び、尖り気味におさめる。立ち上がりはほぼ直立する。	回転ヨコナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1～3) ◎		

表10　ＳＫ３出土遺物観察表　土製品

番号	器　種	法量(cm)	形　態　・　施　文	調　整 外　面	調　整 内　面	色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
46	高台付椀	底径　(7.6) 残高　1.5	やや厚い断面三角形の高台。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1) ◎		
47	甕	残高　3.0	内湾気味に立ち上がる口縁部。口縁端部は「コ」の字状。	ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1) ウンモ ◎		
48	椀	口径(15.6) 底径　(6.6) 器高　4.8	瓦器椀。断面四角形の高台。やや丸みをもちながら口縁部は立ち上がる。	ナデ	ナデ	灰色・浅黄色 灰色	密 ◎		4
49	椀	口径(13.4) 残高　2.5	瓦器椀。口縁端部は細く尖る。	ナデ	ナデ	暗灰黄色 黒褐色	密 ◎		
50	椀	底径　(5.8) 残高　1.3	瓦器椀。断面四角形の低い高台。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	密・ウンモ ◎		4
51	坏身	残高　2.2	受部は水平に伸び、尖り気味におさめる。立ち上がりは内傾する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰・明オリーブ 灰色 灰色	石・長(1) ◎		
52	高台付坏	底径　(9.6) 残高　1.2	短い高台は水平に接地する。	ナデ	回転ヨコナデ	灰白色 灰白色	長(微砂粒) ◎		
53	高坏	底径(10.5) 残高　2.5	脚部片。端面は尖り気味に上下に拡張する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	長(微砂粒) ◎	自然釉	
54	高坏	底径　(8.0) 残高　1.4	脚部片。端部は丸くおさめる。端面はナデ凹む。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	黄灰色 黄灰色	石・長(1) ◎		
55	甕	残高　3.1	口縁部は内湾気味に外反する。端部は内外面に拡張し、端面はナデ凹む。	ナデ	ナデ	灰色 灰色	石・長(1) ◎		
56	甕	残高　3.0	口縁部は内湾気味に外反し、端部は内外面に拡張する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	石・長(1) ◎		
57	こね鉢	底径　(7.0) 残高　1.7	内外面に自然釉が付着。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ◎	自然釉	

表11　ＳＫ４出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器　種	法量(cm)	形　態　・　施　文	調　整 外　面	調　整 内　面	色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
58	坏	口径(12.2) 残高　2.1	口縁端部は厚手で丸くおさめる。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	密・石(1) ◎		
59	皿	底径　(6.4) 残高　1.2	口縁部の立ち上がりは低い。	ナデ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～4) ○		
60	土釜	残高 11.4	脚部片。外面に炭素の付着がみられる。	ナデ	ナデ	暗灰色・にぶい黄橙色	石・長(1～5) ◎		4

ＳＫ４出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
61	土釜	残高 4.9	脚部の先端部片。	マメツ	マメツ	灰黄色	石・長(1～3)◎		
62	坏身	残高 2.4	受部は水平に伸び、尖り気味におさめる。立ち上がりはほぼ直立する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	長(微砂粒)◎		
63	甕	残高 1.1	口縁部片。端部はやや丸みをもつ。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	長(微砂粒)◎		
64	甕	残高 1.8	肩部片。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	長(微砂粒)◎		

表12　柱穴出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
65	坏	口径 11.6 底径3.4~4.1 器高 5.2	口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。底部外面に板目状の圧痕残る。	マメツ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ○	SP21	4
66	高坏	残高 2.6	口縁部片。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	橙色 橙色	石・長(1)◎	SP9	
67	碗	底径 (6.9) 残高 1.8	青磁碗。内外面に施釉がみられる。削り出し高台。	回転ヨコナデ→施釉〔底面〕回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ→施釉	灰白色 灰白色	密◎	青磁 SP4	
68	坏蓋	残高 1.9	口縁端部は丸くおさめる。端部外面に製作時の工具痕が残る。	回転ヨコナデ〔口端〕ハケ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密◎	SP12	
69	坏蓋	残高 1.9	やや丸みをもった天井部。天井部と口縁部の間の稜なし。	〔天上〕回転ヘラケズリ回転ナデ	回転ヨコナデ	黄灰色 灰色	石・長(1)◎	SP4	
70	坏	残高 2.9	口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	長(微砂粒)◎	SP12	
71	坏	底径 (8.5) 残高 1.2	平底の底部。	マメツ〔底面〕回転ヘラ切り	ナデ	灰白色 灰白色	密◎	SP23	
72	高台付坏	底径(10.1) 残高 1.1	短い高台は水平に接地する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白色 灰白色	密・長(1)◎	SP4	
73	甕	残高 1.8	口縁部はやや内傾し、端部はナデ凹む。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	長(微砂粒)◎	SP1	
74	こね鉢	残高 2.8	口縁部片。	ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密◎	SP9	

表13　層位不明遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
75	高台付椀	底径 (7.0) 残高 1.6	やや厚い断面三角形の高台。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 浅黄橙色	石・長(1)◎		
76	土鍋	口径(34.3) 残高 2.9	外傾する口縁部。口縁端部は面をもつ。外面に炭素の付着がみられる。	〔口端〕ヨコナデ ナデ	ナデ	黒色 橙色	長(1～2)ウンモ◎	煤付着	
77	土釜	残高 6.2	体部片。外面に炭素の付着がみられる。	ナデ	ヨコナデ	黒色 灰黄褐色	石・長(1～3)◎	煤付着	
78	土釜	残高 6.0	脚部の先端部片。	ナデ	ナデ	灰褐色 灰褐色	長(1～2)ウンモ◎		
79	椀	口径(15.0) 残高 3.5	瓦器椀。口縁端部は細く尖る。	ナデ	ナデ	黄灰色 黄灰色	密◎		
80	椀	底径 (7.2) 残高 1.4	緑釉陶器。軟質で、底部外面に釉の痕跡がみられる。削り出しの円盤高台。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	微砂粒◎	緑釉	4
81	坏蓋	口径(10.0) 残高 1.9	口縁端部は尖り気味におさめる。天井部と口縁部との境に稜をもつ。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	長(微砂粒)◎		
82	高台付椀	底径(11.0) 残高 2.7	短い高台は水平に接地する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	石・長(1)◎		
83	高台付坏	底径(11.6) 残高 1.0	短い高台は水平に接地する。	ナデ	回転ヨコナデ	浅黄色 浅黄色	長(1)◎		
84	高台付坏	底径(14.3) 残高 1.7	短い高台は水平に接地する。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1～2)◎		
85	高台付坏	底径(13.5) 残高 2.2	短い高台は水平に接地する。	回転ナデ	回転ナデ	黄灰色 灰白色	石・長(1～2)◎		
86	高坏	残高 3.0	弥生土器。高坏の基部。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1)◎		

表14　層位不明遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
87	砥石	不明	砂岩	9.5	7	4.10	427.11		
88	台石	不明	砂岩	11.5	8.1	4.55	583.38		

第３章
樽味高木遺跡14次調査

第３章　樽味高木遺跡14次調査

１．調査の経過

（１）調査に至る経緯

2007（平成19）年６月、松山市樽味四丁目256番１（以下、申請地）における共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財の確認願いが地権者より松山市教育委員会文化財課（以下、文化財課）に提出された。申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地「№81　樽味遺物包含地」内にあり、申請地周辺ではこれまでに数多くの調査が行われ、弥生時代や古墳時代を中心とした集落関連遺構が確認されている。その後、埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査が財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）によって６月14日に行われた。

試掘調査は、対象地内にＴ１～８の８本のトレンチを設定した。申請地はかつて鉄筋コンクリート製建物が建てられていたため、多くの箇所で建物基礎により破壊を受けていた。調査の結果、溝や柱穴を検出し、弥生土器や土師器・須恵器が出土した。この結果を受け申請者及び関係者と文化財課・埋文センターは、遺跡の取り扱いについて協議を重ね、工事に伴って消失する遺跡に対し記録保存のための発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、弥生時代から中世における集落構造の解明及び範囲確認を主目的とし、文化財課の指導のもと埋文センターが主体となり同年７月23日より本格調査を開始した。

（２）調査の経緯

調査区は２箇所あるため、南側調査区を「１区」、北側調査区を「２区」とし、さらに共同住宅建設工事の都合上１区を東西に分け、東側を「１区Ａ」、西側を「１区Ｂ」として、１区Ａ、１区Ｂ、２区の順に調査を行った。調査工程は下記のとおりである。

７月23日、仮設事務所周辺の整備を行うとともに発掘機材や道具の準備を行う。また、近隣の4級基準点から水準点を移設し、調査地周辺及び調査地の平板測量を行う。重機により１区Ａの掘削作業を行う。以後、遺構検出作業を行う。24日、昨日に引き続き１区Ａの遺構検出作業を行い、終了後、完掘状況の写真撮影及び平板測量を行う。その終了後、１区Ａを重機により埋め戻し、１区Ａの調査を完了する。引き続き重機により１区Ｂの掘削作業を行う。25日、昨日に引き続き１区Ｂの遺構検出作業を行う。その際、カクラン土の除去を優先して行う。第Ⅲ層及び第Ⅳ層の掘り下げを順次行う。26日、昨日に引き続き１区Ｂ第Ⅲ層及び第Ⅳ層の掘り下げを行う。重機により２区の掘削作業を行う。27日、１区Ｂ完掘状況の写真撮影及び平板測量を行う。その終了後、１区Ｂを重機により埋め戻し、１区Ｂの調査を完了する。２区の遺構検出作業を行う。30日、先週に引き続き２区の遺構検出作業を行う。終了後、完掘状況の写真撮影及び平板測量を行い、２区の調査を完了する。31日～８月３日、出土遺物の整理・洗浄を行い、全ての屋外作業を終了する。

（３）調査組織

調査地番　　松山市樽味四丁目256番１の一部

調査期間　　2007（平成19）年７月23日～８月３日

調査面積　　25.4㎡

調査担当　　財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター調査員　山之内志郎

2．層位

（1）基本層位

本調査地の基本層位は、第Ⅰ層黄色土（造成土）、第Ⅰ－②層灰色土（旧耕作土）、第Ⅱ層黄褐色土、第Ⅲ層褐色土（遺物包含層）、第Ⅳ層灰色砂質土（遺物包含層）、第Ⅴ層黄褐色土である。

第Ⅰ層は造成土で、厚さ５～25cmを測る。調査区全域に広く堆積する。第Ⅰ層と第Ⅰ－②層との境が明瞭でない部分がある。

第Ⅰ－②層は旧耕作土で、厚さ最大15cmを測る。調査区全域に広く堆積する。

第Ⅱ層は黄褐色土で、厚さ８～65cmを測る。調査区全域に広く堆積する。

第Ⅲ層は褐色土の遺物包含層で、厚さ10～40cmを測る。調査区全域に広く堆積する。

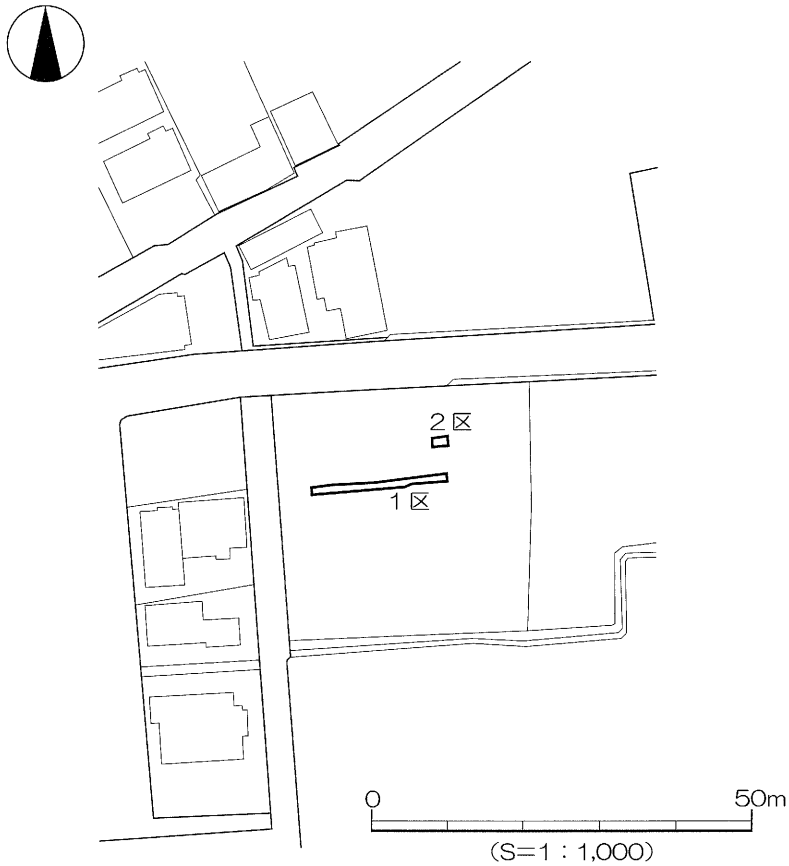
第Ⅳ層は粗い灰色砂質土の遺物包含層である。厚さ10～20cmを測る。調査区全域に広く堆積する。

第Ⅴ層は黄褐色土である。調査区全域に堆積する。この層以下はいわゆる地山と呼ばれる層である。

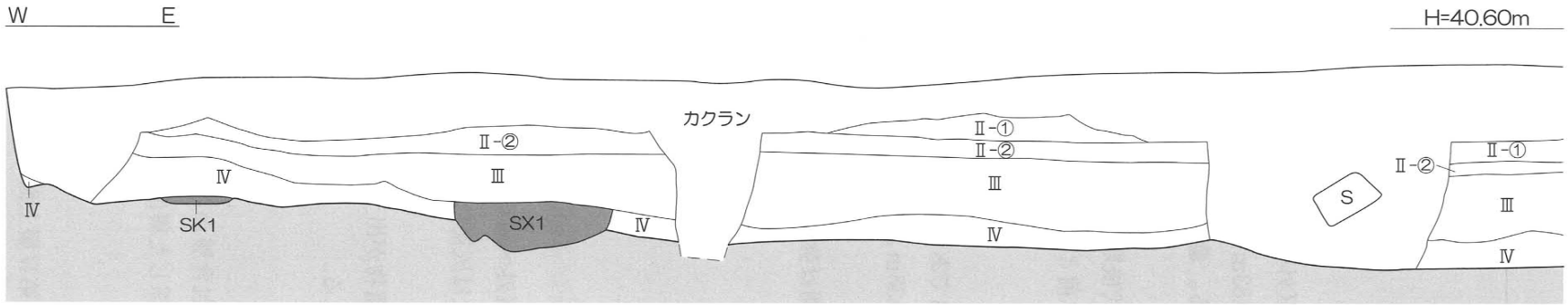
遺構は、第Ⅳ層及び第Ⅴ層上面で検出した。

（2）検出遺構・遺物

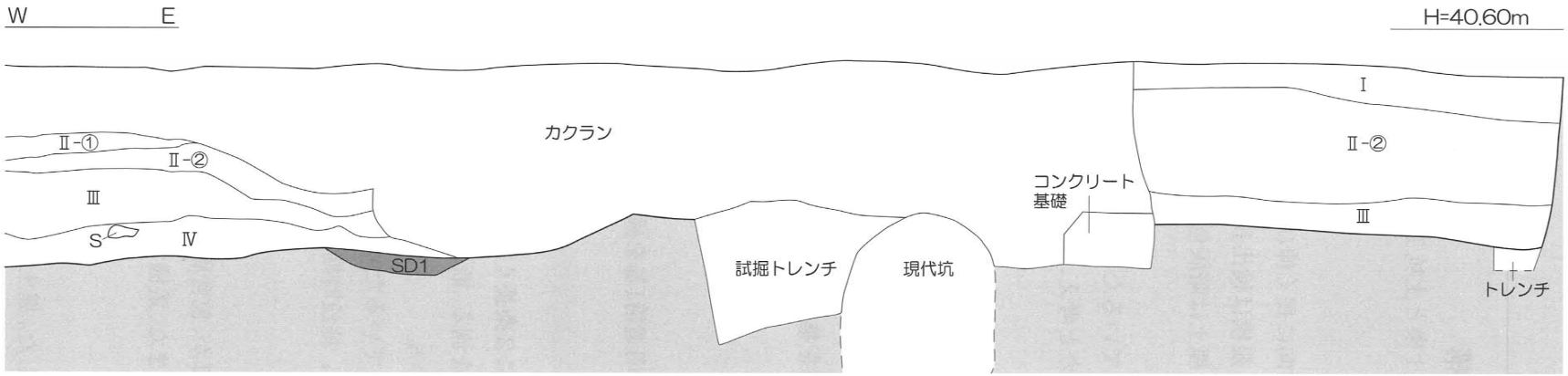
検出した主な遺構は、溝１条、土坑１基、柱穴２基、性格不明遺構１基である。主な出土遺物は



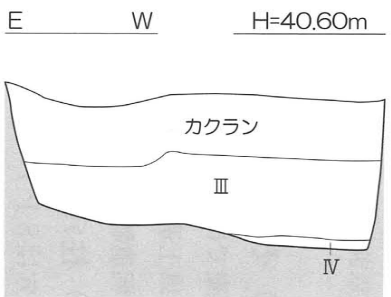
第 23 図　　調査地位置図



1区　北　壁

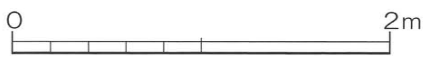


1区　北　壁



2区　南　壁

Ⅰ　黄色土
Ⅱ-①　灰色土
Ⅱ-②　黄褐色シルト（砂礫含）
Ⅲ　褐色粘質土
Ⅳ　灰色砂質土



(S=1:40)

第24図　　1区北壁土層図、2区南壁土層図

弥生土器、土師器、須恵器、青銅製品などがある。

3．遺構と遺物

（1）弥生時代中期以前の遺構

弥生時代中期以前の遺構は、溝１条と土坑１基を検出した。

1）溝

ＳＤ１（第26図）

１区Ｂ東部に位置する。南北方向に長く伸び、北部及び南部は調査区外へ続くと思われる。南部をカクランにより切られている。規模は検出長0.62m、上場幅0.52～0.83m、深さ７cmを測る。断面形態は浅いレンズ状を呈する。埋土は暗灰色粗砂質土の単一層である。遺構内部から遺物は出土していない。

時期：遺構上面を第Ⅳ層が覆っているため、弥生時代中期～古墳時代後期の遺物が出土している第Ⅳ層の堆積以前に遺構は埋没したと考え、埋没時期は弥生時代中期以前と考えられる。

2）土坑

ＳＫ１（第27図、図版６）

１区Ｂ西部に位置する。調査区北壁沿いで検出したため北側は未検出である。平面形態は不整形、断面形態は皿状を呈し、中央付近が若干深くなる。検出規模は0.45×0.36m、深さ４cmを測る。埋土は褐色土の単一層である。土坑内から遺物は出土していない。

時期：ＳＤ１と同様に遺構上面を第Ⅳ層が覆っているため、埋没時期は弥生時代中期以前と考えられる。

（2）古墳時代以前の遺構

古墳時代以前の遺構は、性格不明遺構1基を検出した。

1）性格不明遺構

ＳＸ１（第28図）

１区Ｂ西部に位置する。南方向に２条長く突出して伸び、北部は調査区外へ続く。規模は検出長0.36～0.53m、上場幅0.92m、深さ４cmを測る。断面形態は皿状を呈する。埋土は灰褐色土の単一層である。遺構内部から遺物は出土していない。

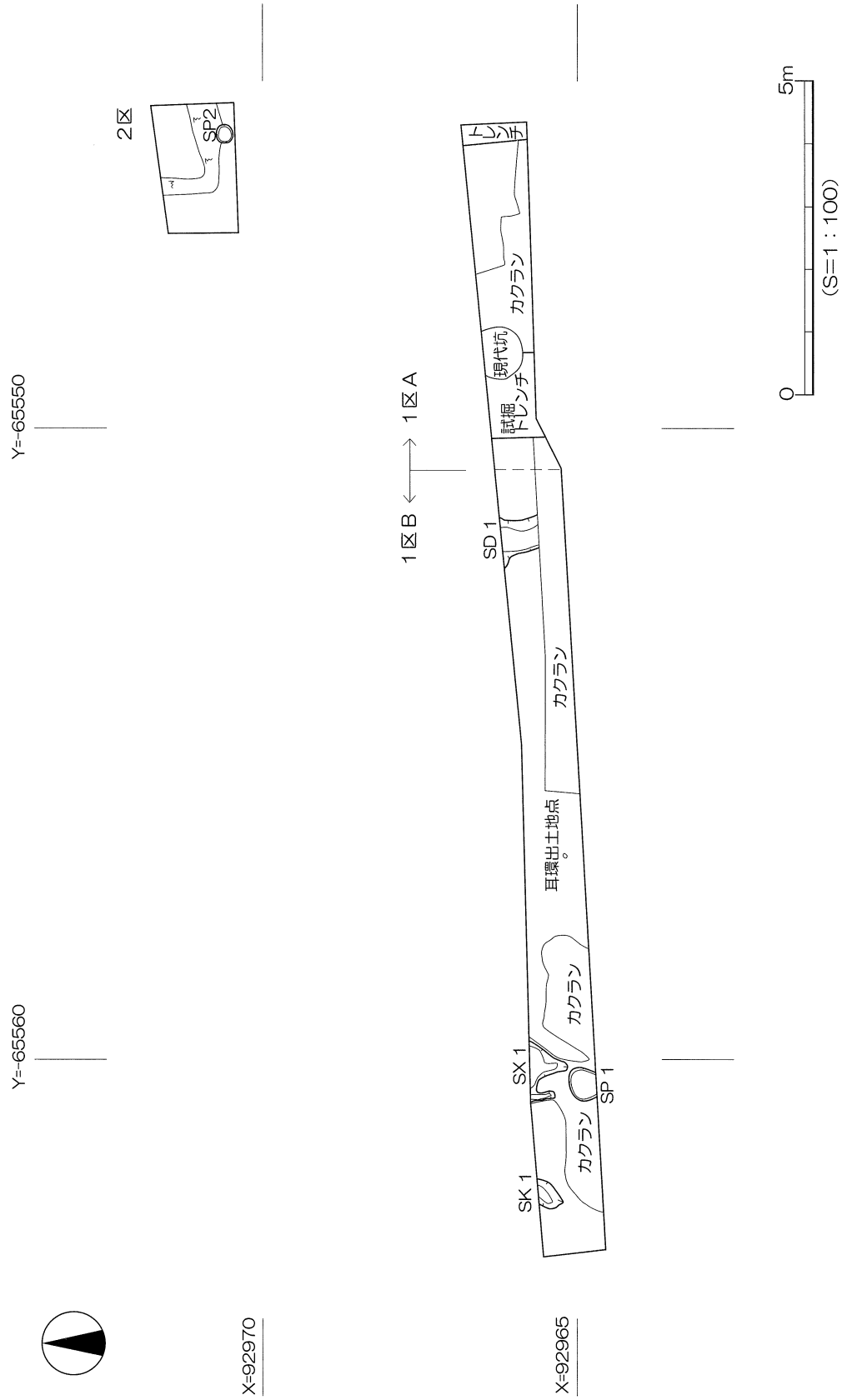
時期：遺構上面を第Ⅲ層が覆っているため、古墳時代～江戸時代の遺物が出土している第Ⅲ層の堆積以前に遺構は埋没したと考え、埋没時期は古墳時代以前と考えられる。

（3）その他の遺構と遺物

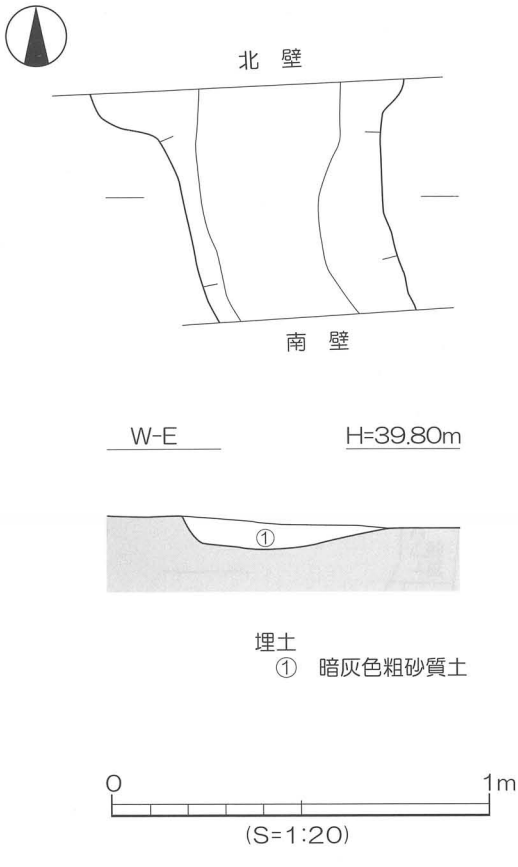
調査では、柱穴２基を検出したほか、包含層から遺物が出土したため、包含層からの出土遺物を「包含層出土遺物」として報告する。また、重機での掘削作業途中などで表採した層位不明な土器を「層位不明遺物」として報告する。

1）柱穴（第25図）

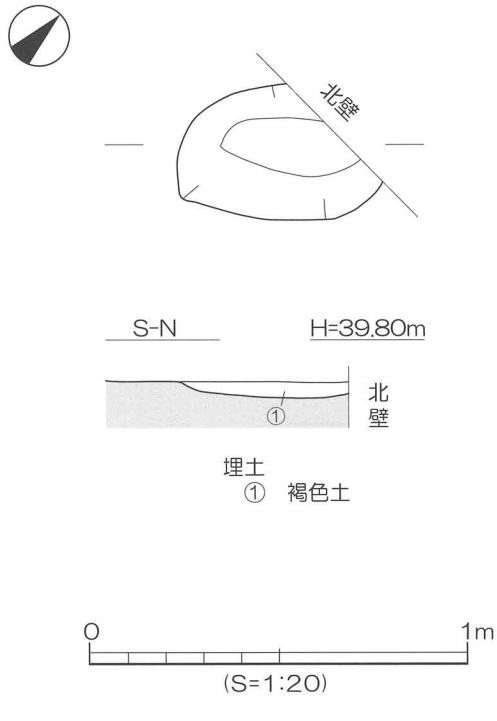
柱穴はＳＰ１・２の２基を検出した。埋土はいずれも灰褐色土であり、第Ⅳ層上面で検出した。よって、ＳＸ１と同様に古墳時代以前に埋没した遺構と考えられる。


2区
SP2
Y=-65550
Y=-65560
X=92970
X=92965
1区A
1区B
トレンチ
カクラン
現代坑
試掘トレンチ
SD 1
カクラン
耳環出土地点
カクラン
SX 1
SP 1
カクラン
SK 1
0
5m
(S=1：100)

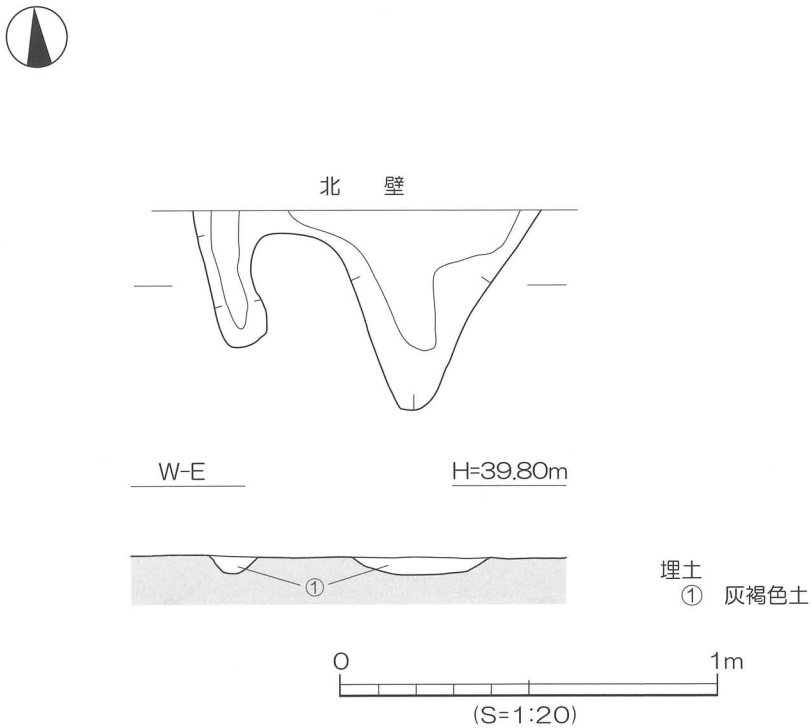
第 25 図　遺構配置図



第 26 図　　SD1 測量図



第 27 図　　SK1 測量図



第 28 図　　SX1 測量図

2) 包含層出土遺物・層位不明遺物

遺物包含層である第Ⅲ層及び第Ⅳ層から多数の遺物が出土した。１区第Ⅲ層、１区第Ⅳ層、２区第Ⅳ層の順に詳述する。

① １区第Ⅲ層出土遺物（第29図、図版８）

１・２は須恵器である。１は高台付坏である。短い高台は水平に接地する。８世紀中頃。２は壺の頸部～肩部である。やや厚手の頸部。８世紀。３は焙烙である。内外面に煤が付着する。ゆるやかに立ち上がる体部に口縁部は下方にやや折り込むように垂下させる。18世紀代。４は耳環である。完形品。外径2.4cm、内径1.5cmを測る。銅芯のみ遺存する。古墳時代。

② １区第Ⅳ層出土遺物（第30・31図、図版８）

５～８は土師器である。５・６は高坏の柱部である。７世紀。７は甑形土器の把手部である。８は器種不明のミニチュア土製品である。甑形土器の把手部の可能性がある。９～33は須恵器である。９～17は坏蓋である。９･10の口縁端部には製作時における刻み目状の圧痕が残るが、方向が異なっている。６世紀末。12の天井部にはヘラ記号がみられる。７世紀前半。18～21は坏身である。18はやや大ぶりな坏身である。６世紀末。22・23は高台付坏である。24は坏である。上げ底状の底部。７世紀代。25は椀である。口縁部は直線的に立ち上がり、端部はやや外傾する。26～29は高坏である。26・27は柱部、28・29は脚端部である。30は壺で、長頸壺の底部と思われる。31～33は甕である。34・35は弥生土器である。34は壺形土器の口縁部である。拡張された口縁端部に凹線文を施す。35は支脚形土器である。中空で上部を欠く。

③ ２区第Ⅳ層出土遺物（第32図、図版８）

36～38は土師器である。36は坏である。回転糸切りの底部。37・38は皿である。いずれも平底の底部である。39～42は須恵器である。39は坏身である。40は高台付坏である。41は壺の頸部～肩部である。42は硯である。硯部と脚部は同時に製作する。脚部は内湾気味に伸び､裾部は丸くおさめる。硯としては径が小さいため高台付坏の可能性も考えられたが、脚部中位に円孔があることから硯として報告する。43・44は弥生土器である。43は甕の口縁部である。直線的に外方に伸びる口縁部の端面に刻み目を施す。前期末～中期初頭。44は甕の平底の底部。中期。

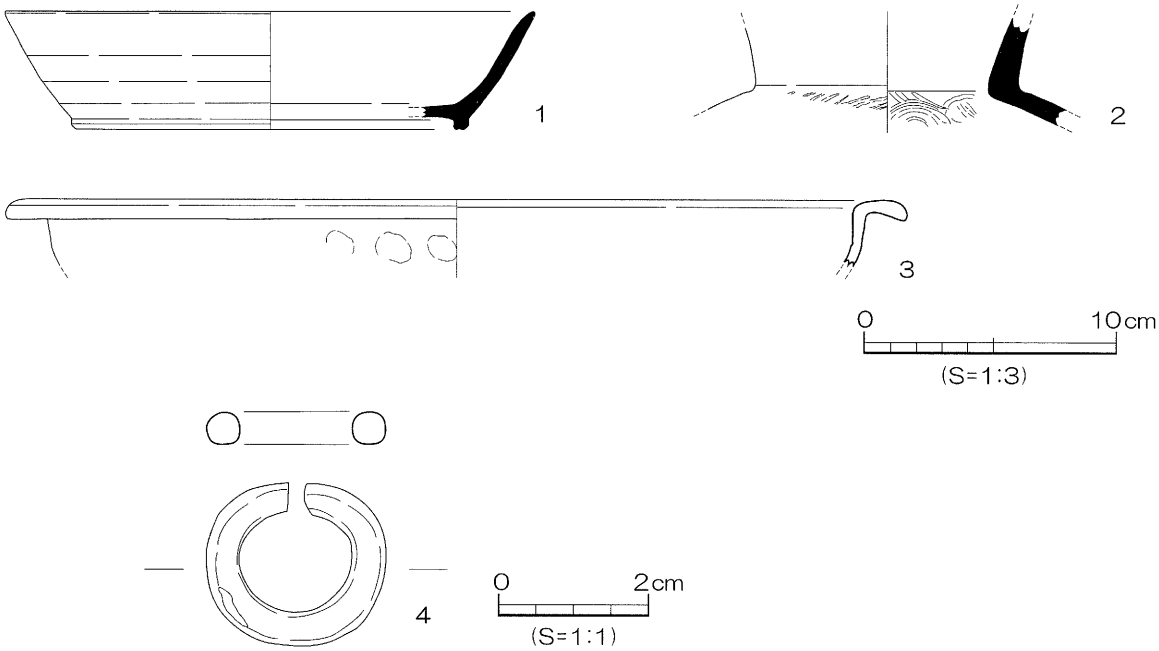
④ １区層位不明遺物（第33図）

45～52は須恵器である。45・46は坏身である。47は坏である。48・49は高台付坏である。50は椀の口縁部と思われる。口縁部は内湾気味に立ち上がる。51は高坏である。52は壺の底部である。

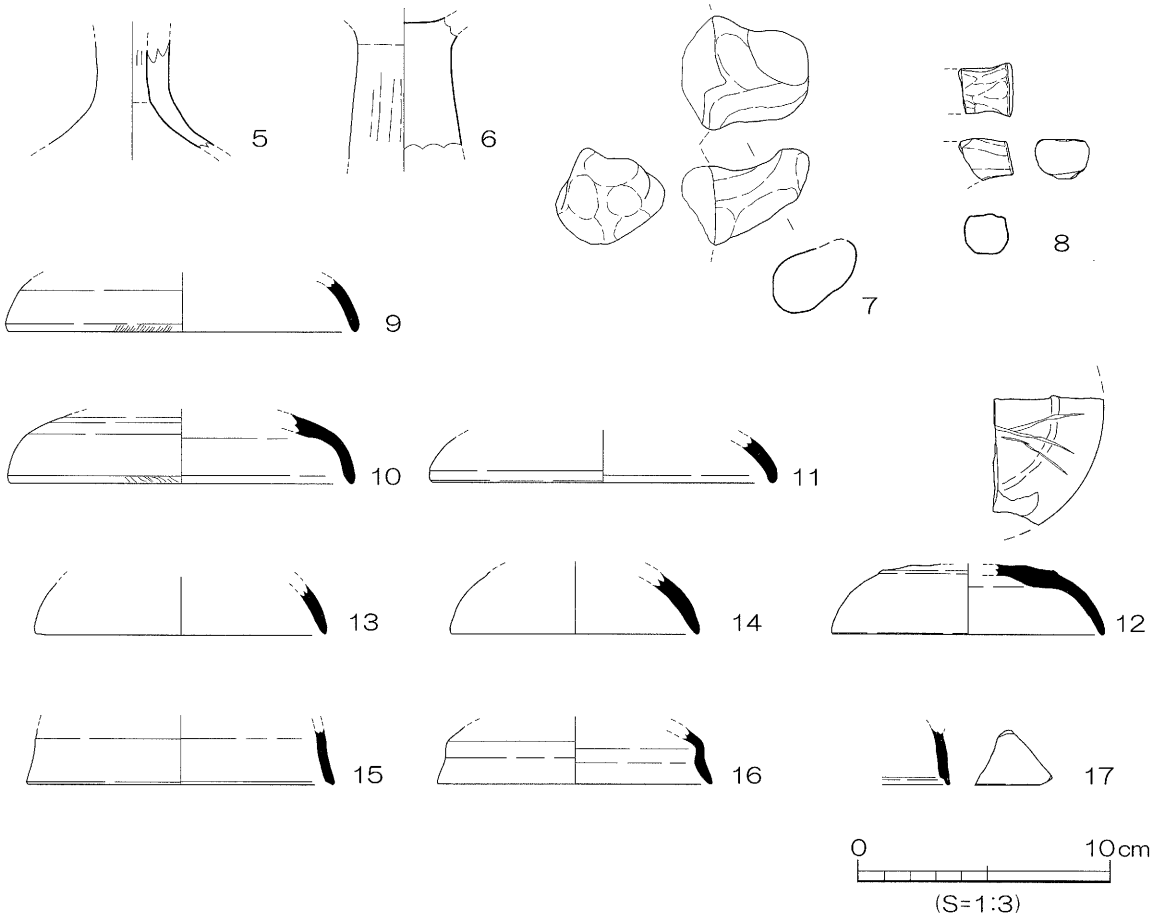
4．小　結

本調査は、弥生時代から中世における集落の構造解明及び範囲確認を主目的として調査を実施した。その結果、溝・土坑・柱穴などを検出した。そのほか、包含層より弥生時代から江戸時代における大量の遺物を確認することができた。これらのうち特筆すべきものについて列挙することでまとめとしたい。

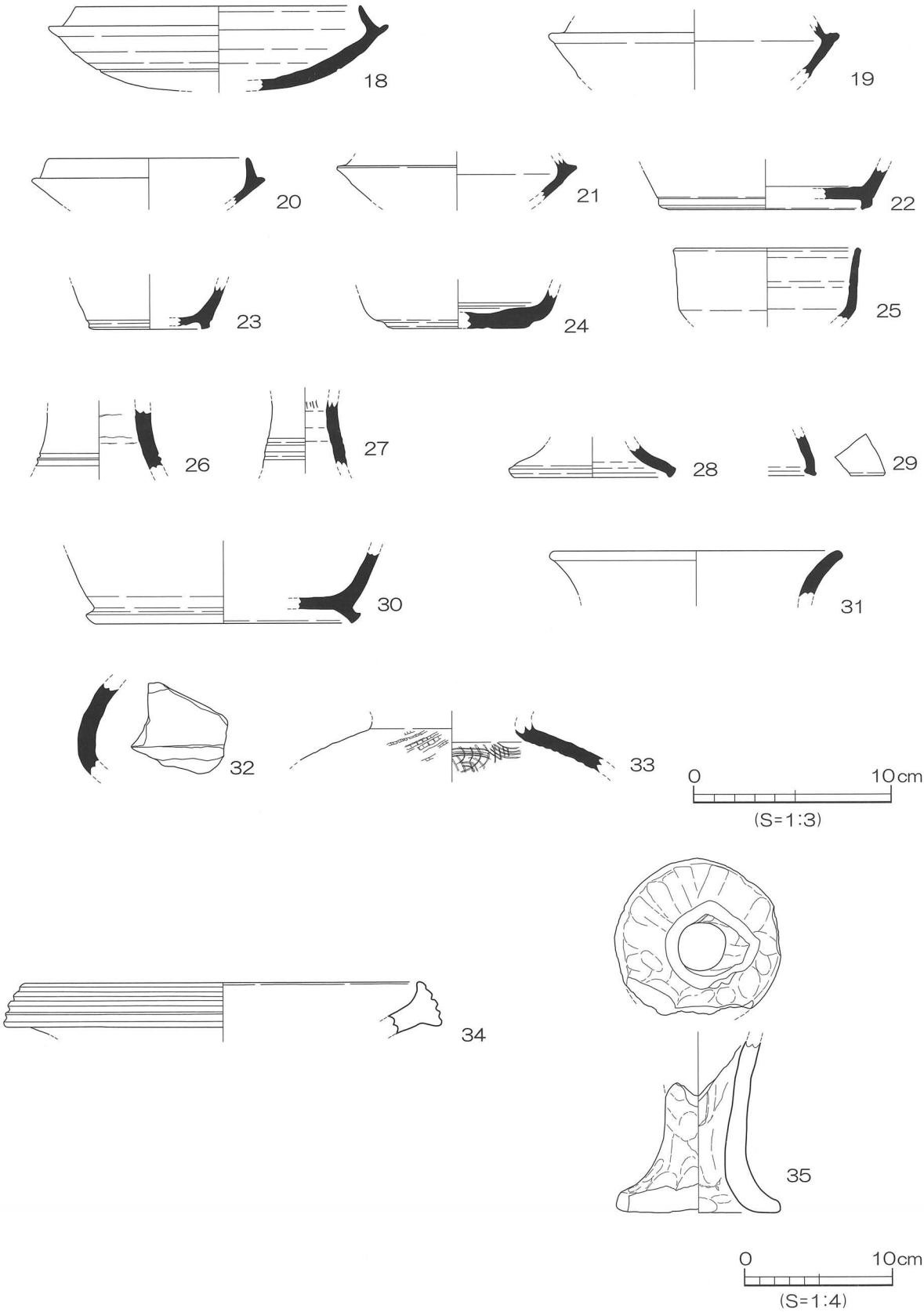
まず遺構では、弥生時代中期以前の溝や土坑と、古墳時代以前の性格不明遺構などを検出した。遺構内からの遺物の出土がなかったため、明確な時期決定を行うことができず、かつその性格解明にも至っていないが、今後の周辺地域での調査から各時代における集落域を復元できる可能性は高いと考えられる。



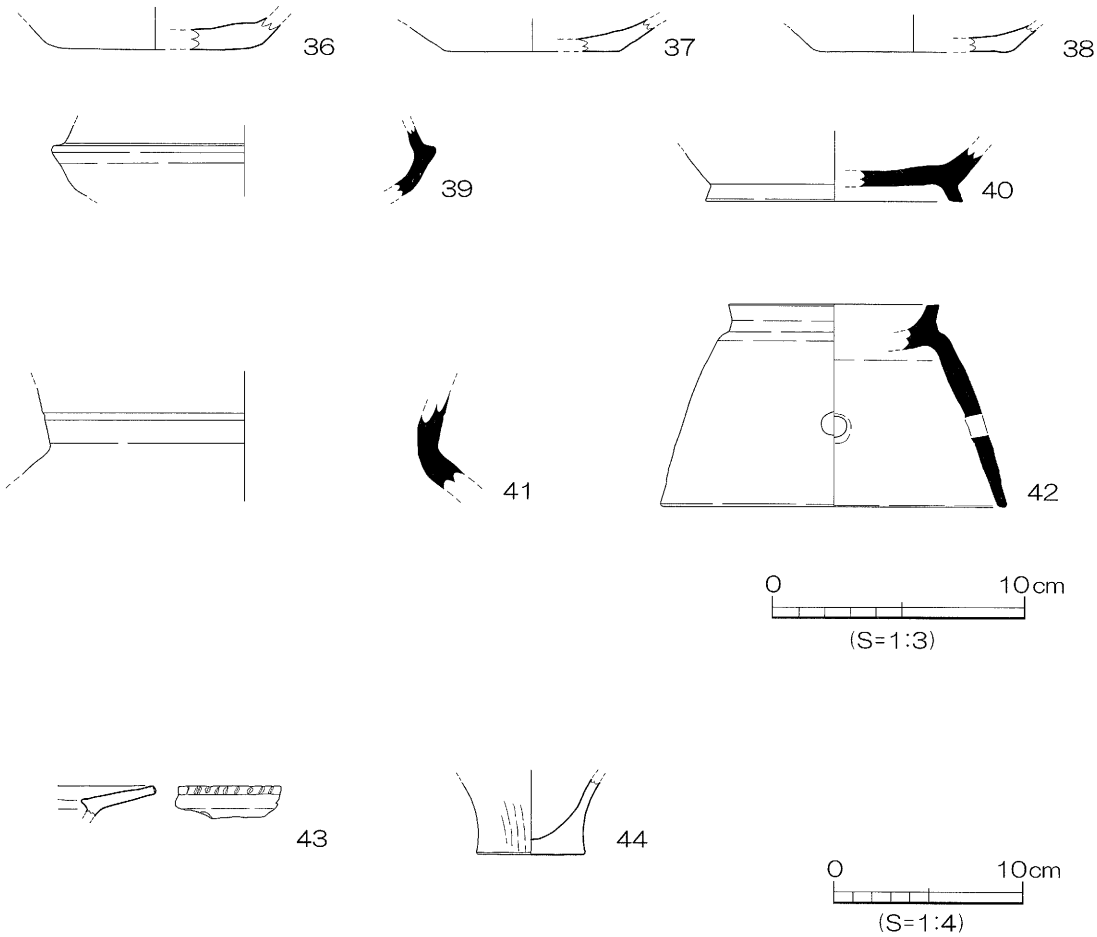
第 29 図　　1 区第Ⅲ層出土遺物実測図



第 30 図　　1 区第Ⅳ層出土遺物実測図（1）



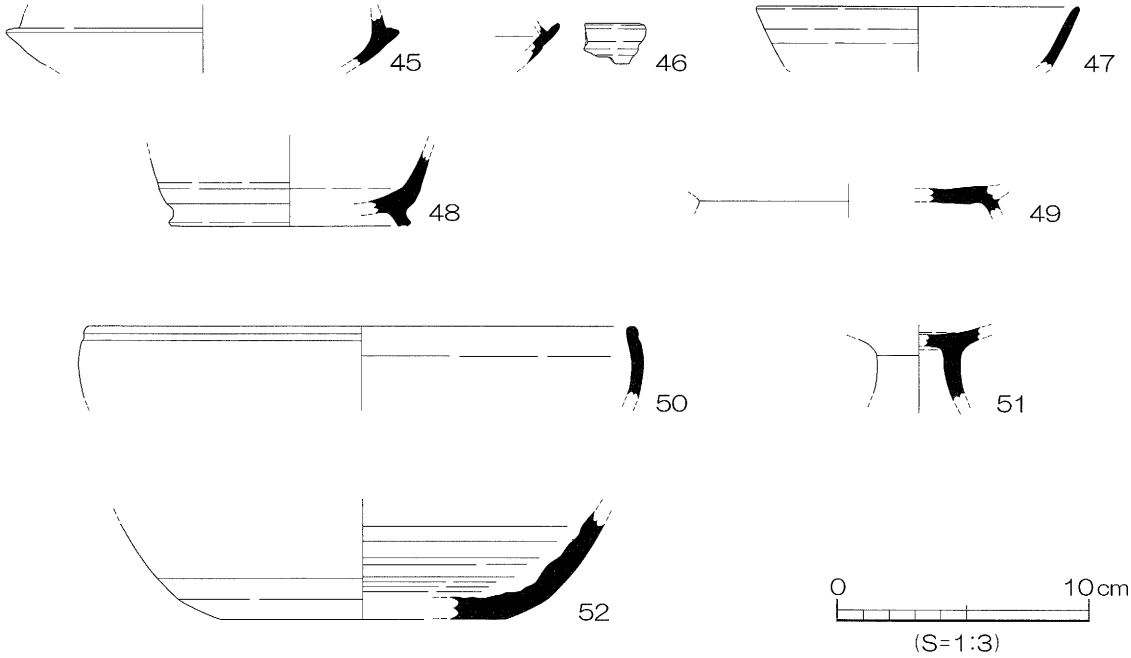
第 31 図　　1 区第Ⅳ層出土遺物実測図（2）



第 32 図　　2 区第Ⅳ層出土遺物実測図

次に遺物では、包含層内で出土した耳環や円面硯が挙げられる。耳環は古墳時代の埋葬施設において通常２点セットで出土することが多いのに対して本例は包含層で単独出土である。近年同様な出土例が松山平野内で増加しているため、その用途や目的については今後の検討課題としたい。また円面硯は、過去に樽味地区では本調査地の南方向に位置する樽味四反地遺跡５次調査地において４個体が出土している。そのため、今後の周辺地域における調査の進展によって、周辺で寺院または役所やその関連施設が確認できる可能性は高い。

以上のように、検出した遺構からだけではなく、出土した遺物からも古代における集落の様相を垣間見ることが可能である。今後は、従来樽味地区において注目されてきた弥生時代や古墳時代における集落様相や大型建造物のみならず、古代～中世における集落や施設の解明を進めていかなくてはならない。



第33図　　1区層位不明遺物実測図

遺物一覧　－凡例－

(1)　以下の表は、本調査地検出の遺物の計測値及び観察一覧である。

(2)　遺物観察表の各記載については下記のとおりとする。

法　量　欄　（　　）：復元推定値

調　整　欄　土器の各部位名称を略記した。

例）口→口縁部、口端→口縁端部、胴→胴部、体→体部、脚→脚部、底→底部、坏→坏部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土。

（　　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1～4）→1～4mm大の石英・長石を含む。

焼成欄の略記について。

例）◎→良好、○→良、△→不良

表15　溝一覧

溝（SD）	地区	断面形	方向	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	出土遺物	時　期	備　考
1	1区B東部	レンズ状	南北	(0.62)×0.52～0.83×0.07	暗灰色粗砂質土		弥生時代中期以前	

表16　土坑一覧

土坑（SK）	地区	断面形	方向	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	出土遺物	時　期	備　考
1	1区B西部	不整形	皿状	(0.45)×(0.36)×0.04	褐色土		弥生時代中期以前	

表17　性格不明遺構一覧

性格不明遺構（ＳＸ）	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	出土遺物	時　期	備　考
1	１区Ｂ 西部	不整形	Ⅲ状	(0.36～0.53)×(0.92)×0.04	灰褐色土		古墳時代 以前	

表18　１区第Ⅲ層出土遺物観察表　土製品

番号	器　種	法量(cm)	形　態　・　施　文	調　整		色調(外面) (内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
1	高台 付坏	口径(21.0) 底径(15.7) 器高　4.7	短い高台は水平に接地する。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は尖り気味におさめる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	微砂粒 ○		
2	壺	残高　4.2	やや厚手の頸部～肩部。	回転ナデ 〔肩〕タタキ	回転ナデ 〔肩〕タタキ	明オリーブ色 明オリーブ色	密 ◎		
3	焙烙	口径(35.6) 残高　2.6	ゆるやかに立ち上がる体部に「L」字状に折れ曲がる口縁部。	ナデ(指頭痕)	ナデ	黒色 黒褐色	石・長(1) ◎	煤付着	

表19　１区第Ⅲ層出土遺物観察表　青銅製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
4	耳環	完形	銅	2.1	2.4	0.45	5.45		

表20　１区第Ⅳ層出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器　種	法量(cm)	形　態　・　施　文	調　整		色調(外面) (内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
5	高坏	残高　4.2	柱部。	マメツ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1)赤 ウンモ ◎		
6	高坏	残高　5.6	やや厚手の柱部。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1～2) ◎		
7	甑	残高　3.8	断面やや扁平な把手部。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～3) ◎		
8	ミニチュア 土製品	長さ　2.2 幅　2.2	器種不明。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	密 ◎		
9	坏蓋	口径(14.0) 残高　2.1	口縁端部は丸くおさめる。端部外面に製作時の工具痕が残る。	回転ナデ 〔口端〕刻み目	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
10	坏蓋	口径(13.8) 残高　2.8	口縁端部は直立気味に丸くおさめる。端部外面に製作時の工具痕が残る。	〔口端〕刻み目	回転ヨコナデ	オリーブ色 明オリーブ色	密 ○		
11	坏蓋	口径(13.8) 残高　1.8	口縁端部は丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ色 明オリーブ色	密 ◎		
12	坏蓋	口径(10.6) 残高　2.8	口縁端部は尖り気味におさめる。やや丸い天井部にヘラ記号を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1～2) ◎		
13	坏蓋	口径(11.6) 残高　2.0	口縁端部は尖り気味におさめる。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	暗灰色 灰白色	密 ◎		
14	坏蓋	口径　(9.7) 残高　2.5	口縁端部は尖り気味におさめる。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
15	坏蓋	口径(12.2) 残高　2.2	口縁端部は外反気味におさめる。端面は凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	明オリーブ色 灰オリーブ色	密 ◎		
16	坏蓋	口径(10.9) 残高　2.3	口縁部は内湾したのち外反し、端部は尖り気味におさめる。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密・白色粒 ◎		
17	坏蓋	残高　2.2	口縁端部は内傾する面をもち凹む。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		
18	坏身	口径(14.4) 残高　4.3	受部は外上方に短く伸びる。立ち上がりは内傾し端部は尖り気味に長く伸びる。	回転ナデ 〔底〕回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1～2) ◎		
19	坏身	残高　2.9	受部は水平方向に短く伸びる。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		
20	坏身	口径(10.2) 残高　2.4	受部は水平方向に短く伸びる。立ち上がりはやや内傾し端部は尖り気味におさめる。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ○		
21	坏身	残高　2.1	受部は水平方向に短く伸びる。	ナデ	施釉	オリーブ黄色 灰白色	石・長(1～2) ◎	緑釉	
22	高台 付坏	底径　(9.8) 残高　2.1	短い高台は内側が接地する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
23	高台 付坏	底径　(6.1) 残高　2.2	短い高台は内側が接地する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ 〔底面〕回転ヘラケズリ	灰白色 灰白色	密 ◎		
24	坏	底径　(7.2) 残高　1.9	厚手の平底の底部。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
25	椀	口径　(9.2) 残高　3.6	口縁部は直線的に立ち上がり端部はやや外傾し丸くおさめる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

1区第Ⅳ層出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
26	高坏	残高 2.7	柱部片。中位に2条の凹線。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
27	高坏	残高 3.5	柱部片。中位に2条の凹線。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長(1) ◎		
28	高坏	底径 (7.9) 残高 1.6	脚端部片。端面は内外方に拡張する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		
29	高坏	残高 2.1	脚端部片。端面は内外方に拡張する。	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰色 灰色	密 ◎		
30	壺	底径(13.0) 残高 3.6	「ハ」の字に開く高台は内側が接地する。	回転ナデ	回転ヘラケズリ 〔底〕回転ナデ	灰白色 灰色	密 ◎		
31	甕	口径(14.8) 残高 2.3	口縁部片。端部は丸く仕上げる。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
32	甕	残高 4.6	外反気味に立ち上がる頸部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1) ◎		
33	甕	残高 2.7	肩部片。	タタキ	タタキ	灰白色 灰白色	密 ○		
34	壺	口径(26.4) 残高 3.5	口縁端部は拡張され4条の凹線を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) ◎		
35	支脚	底径(11.0) 残高 11.5	円柱状。	ナデ	ナデ	橙・にぶい黄橙 にぶい黄橙色	石・長(1～2)金 ◎		

表21　2区第Ⅳ層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
36	坏	底径 (8.4) 残高 1.3	やや厚手の平底の底部。	ヨコナデ 〔底〕回転糸切り	回転ヨコナデ	灰白色 灰白色	石・長(1～2) ◎		
37	皿	底径 (6.9) 残高 1.3	平底の底部。	ヨコナデ 〔底〕回転ヘラ切り	ナデ	橙色 橙色	石・長(1～2) ◎		
38	皿	底径 (7.8) 残高 1.0	平底の底部。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～2) ◎		
39	坏身	残高 2.8	受部は外方に短くのびる。	回転ナデ	ナデ	灰色 灰色	石・長(1) ◎		
40	高台付坏	底径(10.2) 残高 2.2	やや高めの高台は水平に接地する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	石・長(1～2) ◎		
41	壺	残高 4	やや厚手の頸部～肩部。頸部に1条の凹線。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石(1)・密 ◎		
42	硯	底径(13.6) 器高 8.1	脚部は内湾気味に伸び裾部は丸くおさめる。脚部中位に円孔あり。硯部外堤端部は水平におさめる。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	石・長(1～2) ◎		
43	甕	残高 1.6	「L」字状に折れ曲がる口縁部。端部に刻み目を施す。	ナデ	ナデ	暗灰色 暗灰色・にぶい黄橙色	石・長(1～2) ◎		
44	甕	底径 5.7 残高 4.7	わずかにくびれる平底の底部。	ミガキ？	ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長 ◎		

表22　1区層位不明遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
45	坏身	残高 2.0	受部は水平方向に短く伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ◎		
46	坏身	残高 1.6	受部は外上方に短く伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
47	坏	口径(12.8) 残高 2.4	口縁端部は尖り気味におさめる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
48	高台付坏	底径 (9.6) 残高 3.0	「ハ」の字に開く高台は内側が接地する。端面は凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	石・長(1) ◎		
49	高台付坏	底径(12.0) 残高 1.1	短い高台。	回転ナデ	回転ナデ	明オリーブ色 明オリーブ色	密 ◎		
50	椀	口径(12.8) 残高 2.9	口縁部は内湾気味に立ち上がる。端部下に1条の凹線を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
51	高坏	残高 2.8	柱部の基部。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎		
52	壺	底径(11.3) 残高 4.3	底部片。外面に自然釉が付着。	回転ナデ	回転ナデ	灰オリーブ色 灰色	密 ◎	自然釉	

第４章　調査の成果と課題

今回の２遺跡の調査では、弥生時代から中世にかけての遺構と遺物を確認することができた。樽味四反地遺跡15次調査（以下、四反地15次）では、主に古墳時代と古代末から中世にかけての遺構と、弥生時代から中世に及ぶ遺物を検出した。一方、樽味高木遺跡14次調査（以下、高木14次）では古墳時代以前の遺構と、弥生時代から江戸時代にかけての遺物を検出した。いずれも狭小な調査区であったにもかかわらず、多量の遺物が出土するとともに数多くの成果を得た。ここでは、両遺跡で確認された遺構と遺物について時代別にまとめをおこなう。

（１）弥生時代

高木14次では、弥生時代中期以前の溝や土坑を確認した。特に溝は南北方向に伸びており、埋土が暗灰色粗砂質土であることから、かつては流水があったものと考えられる。今回の調査ではわずか60cm余りの検出のため、その機能や性格は周辺地域での調査成果を待って明らかにしたい。

（２）古墳時代

古墳時代後期以前と推定される遺構として四反地15次のＳＤ５が挙げられる。調査区の西端で東西に伸びる幅８cm、深さ15cmの溝で、幅のわりに深く垂直に掘り込まれており、何らかの意図をもって人工的に掘られたものと推測される。ＳＤ５と同様の黒色土の埋土をもつ遺構として、四反地15次でＳＫ１・２の２基が該当する。本報告では土坑としたが、同程度の規模の遺構であるため本来は掘立柱建物などを構成する柱穴であった可能性も考えられる。

遺物では、高木14次において１区第Ⅲ層で耳環１点が出土した。今後は、副葬品としてではなく集落内での単独出土の理由を類例調査により解明していきたい。

（３）古代

四反地15次のＳＤ１は古代末に埋没したと推定される。復元すると上場幅2.5～3.0m程度の溝と推定され、その規模などから集落域を区画するための溝ではないかと考えられる。またＳＤ３・４がＳＤ１の附属した遺構としての可能性があるのかどうか、他の遺跡での類例を待ちたい。なお、四反地15次の南地点で過去に樽味四反地遺跡１次調査（以下、四反地１次）を発掘調査しており、その際に「落ち込み」として報告されている遺構がある（梅木・山之内1992）。四反地15次ＳＤ１とは埋土が異なる遺構であるが、改めて関連するものかどうか再整理の必要があろう。

遺物では、四反地15次で緑釉陶器が出土したほか、高木14次では円面硯が出土した。樽味地区での類例をあたってみると、緑釉陶器は南接する四反地１次で包含層中から複数個体出土し、円面硯は樽味四反地遺跡５次調査で４個体が出土している。これらを総合的に考えると樽味地区で寺院または役所やその関連施設が存在していた可能性は高いといえる。

（４）中世

四反地15次で土坑３基などを確認し、土師器や瓦器椀などが出土していることから、周辺地域は集落として機能していたことが明らかとなった。

樽味地区では近年松山市道樽味溝辺線の開通以来、土地開発が急激に増加している。今後は、全国的にも注目されている弥生時代後期末～古墳時代初頭に存在したとされる３棟の大型建物の時期以外にも着目し、大型建物が成立しえた時代的・地理的背景や、建物廃絶後の様相解明が急務であろう。

写 真 図 版

写真図版データ

1．遺構は、主な状況については、４×５判や６×７判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35㎜判で補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーアンギュロン90㎜他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67　55㎜他
	ニコンニューFM２		ズームニッコール28～85㎜他
フィルム	白　黒　ネオパンSS・アクロス		
	カラー　アスティア100F		

2．遺物は、4×5判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビュー45G
レンズ	ジンマーS 240㎜F5.6他
ストロボ	コメット/CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	ネオパンアクロス

3．単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキー45MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール135㎜ F5.6A・50㎜ F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードⅣ RCペーパー

4．製版　写真図版175線
　印刷　オフセット印刷
　用紙　マットコート76.5kg
　製本　アジロ綴じ

【参考】『埋文写真研究』vol.1～20　『報告書制作ガイド』

［大西朋子］

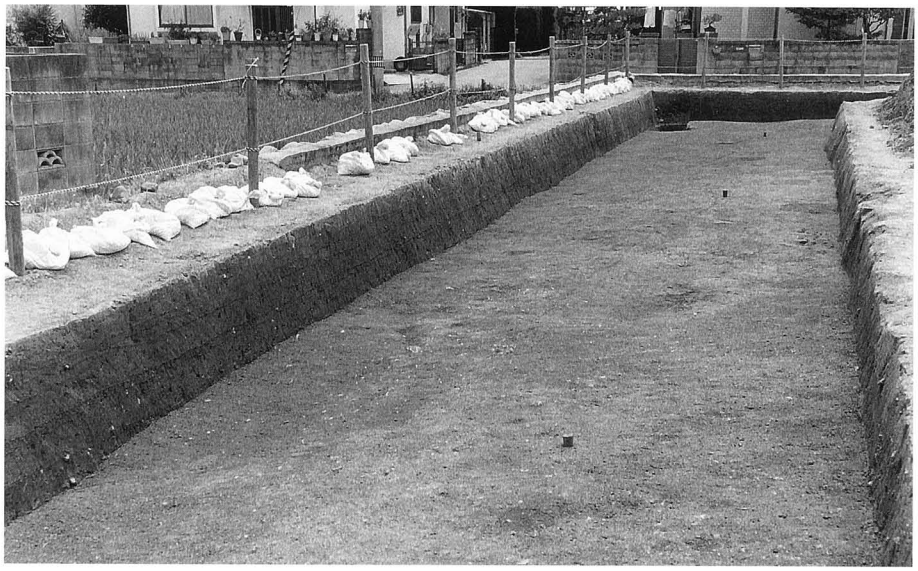
1．調査前風景
（北西より）

2．掘削状況
（北西より）

3．南壁土層
（北より）

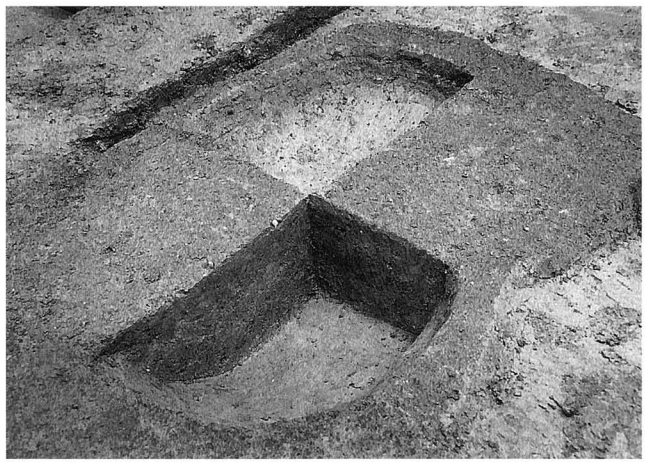
図版 2

1．遺構検出状況
（西より）

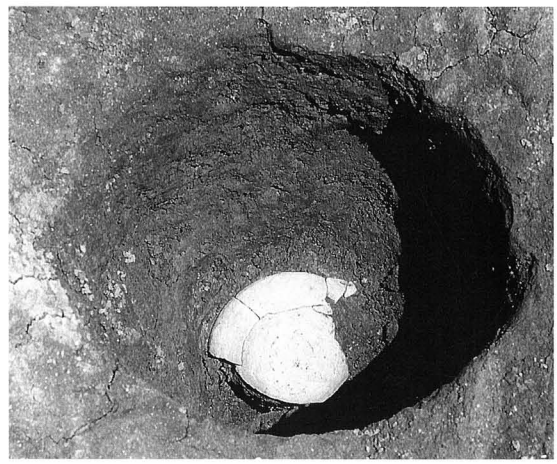


2．ＳＤ１検出状況
（北東より）

3．ＳＫ１・ＳＰ 11
検出状況
（南より）



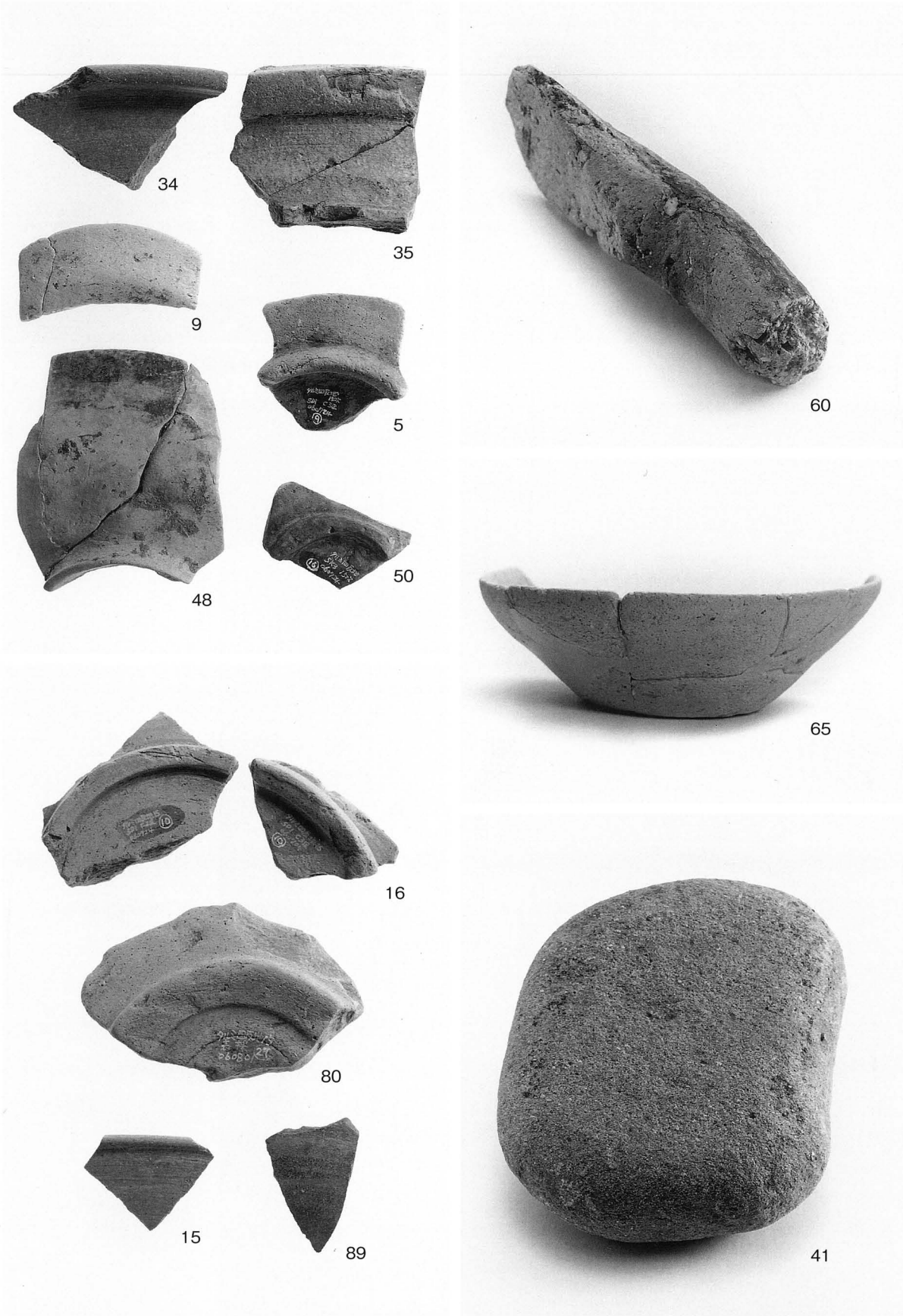
1．ＳＫ３土層（北西より）



2．ＳＰ 21 遺物出土状況（南より）

3．完掘状況（西より）

図版 4



1．ＳＤ１出土遺物（5・9・15・16・34・35・41・89）、ＳＫ３出土遺物（48・50）、ＳＫ４出土遺物（60）、ＳＰ 21 出土遺物（65）、層位不明遺物（80）

1．調査前風景
（北東より）

2．１区Ａ完掘状況
（東より）

3．１区Ｂ第Ⅲ層検出状況
（東より）

図版 6

1．ＳＫ１完掘状況
（南より）

2．１区Ｂ
遺物出土状況①
（東より）

3．１区Ｂ
遺物出土状況②
（東より）

1．1区B完掘状況
（西より）

2．2区完掘状況
（東より）

3．作業風景
（西より）

図版 8

1．1 区第Ⅲ層出土遺物（1・3・4）、1 区第Ⅳ層出土遺物（12・18・30・34・35）、2 区第Ⅳ層出土遺物（42）

報告書抄録

ふりがな	たるみしたんじいせき　たるみたかぎいせき
書　　名	樽味四反地遺跡15次調査　樽味高木遺跡14次調査
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第144集
編 著 者 名	山之内志郎・大西朋子
編 集 機 関	松山市教育委員会 財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
所　在　地	市教委：〒790－0003　松山市三番町六丁目６番地１　TEL 089－948－6605 市埋文：〒791－8032　松山市南斎院町乙67番地６　TEL 089－923－6363
発行年月日	西暦2010年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
樽味四反地遺跡 15次調査	愛媛県松山市樽味	38201		33° 50′ 19″	132° 47′ 24″	20060710～ 20060809	220	分譲住宅 建設
樽味高木遺跡 14次調査	愛媛県松山市樽味	38201		33° 50′ 23″	132° 47′ 20″	20070723～ 20070803	25.4	共同住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
樽味四反地遺跡 15次調査	集落	古墳時代以前 古墳時代 古代 中世	溝 土坑 溝 土坑	須恵器 土師器･須恵器･瓦器･陶磁器 土師器･須恵器･瓦器	
樽味高木遺跡 14次調査	集落	弥生時代以前 古墳時代以前 包含層	溝・土坑 性格不明遺構	土師器・須恵器・青銅製品	包含層より耳環･硯が出土

要　　約	樽味四反地遺跡15次調査では、古代末～中世にかけての溝を確認した。集落を区画するための溝である可能性が高い。樽味高木遺跡14次調査では包含層から硯が出土した。寺院や役所の存在を傍証する貴重な遺物であり、樽味地区における古代の様相を知る上で重要な手がかりとなるものである。

松山市文化財調査報告書　第144集

樽味四反地遺跡15次調査
樽味高木遺跡14次調査

平成22年３月31日　発行

編・集　松山市教育委員会
発　行　〒790－0003　松山市三番町六丁目６番地１
TEL（089）948－6605

財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791－8032　松山市南斎院町乙67番地６
TEL（089）923－6363

印　刷　原印刷株式会社
〒799－1594　今治市喜田村１丁目２－１
TEL（0898）48－5511